

俺の毒舌幼馴染のデレが少なすぎて辛い

島流しの民

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

デレの少ない幼馴染の話。

[https://syosetu.org/?mode=kappa
|view&kid||249726&uid||2
53213](https://syosetu.org/?mode=kappa&view&kid||249726&uid||253213)

→→

→→
ネタ募集

目次

いつもの日常……？①	1
いつもの日常……？②	6
新しい日常	14
ダラダラするだけの話	19
デート回	25
七夕	30
夏祭り ①	39
夏祭り ②	43
小鳥遊花梨について 前編	53
小鳥遊花梨について 中編	59
小鳥遊花梨について 後編1	65
小鳥遊花梨について 後編2	70
年越しは毒舌幼馴染と	77
毒舌幼馴染に甲斐甲斐しく看病される話	85
毒舌幼馴染のチョコは少し苦め	93
毒舌幼馴染と海	100
毒舌幼馴染と海 ②	109
一番タチの悪いイタズラ	116

いつもの日常……？①

毒舌幼馴染、という存在をご存じだろうか？

それはその名の通り、毒を吐く幼馴染というもの。大体はインターネット上の小説の中の存在であり、なよなよしている男主人公のことを叱咤激励し時に可愛らしい面を見せる幼馴染という立場にいるキャラクターである。

曰く、ギャツプ萌え。

曰く、毒舌尊い。

だが、それは果たして本当なのだろうか？

思春期の男子のプライベートにずかずかと入り込んで、あーだこーだと横から口を挟む存在を、萌えと……尊いと言えるのだろうか？

俺は思わない。

毒舌なんてものは所詮空想上の生き物であり、我々異性に飢えた男共の夢なのである。はつきり言おう、現実の毒舌幼馴染なんてクソである。

何故俺がここまで毒舌を毛嫌いしているか、それは簡単である。

俺の幼馴染が実際に毒舌だからである。

毒舌。

悪たれ口。

ポイズンタング。

とにかく、そういうこと。

俺の隣人の幼馴染は、とにかく口が悪い。口が悪いのに加え素行も悪い。気に入らないことがあるとすぐに拳が飛んでくる。

特殊な趣味を持っている男子なら喜ぶこの幼馴染だが、あいにく俺はノーマルなのだ。幼馴染のこういった行動は、まあとにかく面倒くさい。

これでデレの一つでも見せれば、まあしょうがねえなと言ってやらんこともないが、なんとこの毒舌幼馴染、デレを見せないのだ。とにかく毒舌しか吐かない。もはや存在が毒舌。

この幼馴染の存在は、俺を毒舌嫌いにさせるには十分すぎる要素

だった。

ダラダラと冗長になってしまったが、言いたいことは一つだけである。

俺の毒舌幼馴染のデレが少なすぎて辛い。



うつらうつらと眠りの沼に浸かっていた俺の耳に、どすどすと何か
が大きな音をたてながらこちらへ向かってくる音が聞こえて来た。

足音はすぐに止まった。俺の部屋の前だった。薄らと目を覚まし
ていた俺は、布団の中でぐつと伸びをする。するとタイミングを見計
らったかのようにドアが開いた。

部屋に入ってきた「そいつ」は、冷たい目で俺を見下ろしながら言っ
た。

「あら、もう起きていたの。どうせなら一生布団の中で寝腐ってい
てもよかったのだけれど」

「……おはよ」

「おはよう？ 冗談言わないでよ。こんな時間に起きといっておはよう
はないでしょう。耳、目、頭が腐っていたのは知っていたけれど、ま
さか口も腐っていたとはね」

「そんな遅い時間じゃないだろ……むしろまだ早朝の部類だし」

流れるように飛んでくる罵詈雑言を避けながら起き上がる。閉め
るのを忘れていたカーテンから差す陽光が眩しかった。

続いて俺は、俺を起こしに来てくれたありがたい幼馴染を見やる。

腰辺りまで伸びた流れるような黒髪に、雪のように白い肌。小さな
鼻と桜色の唇は不思議な色気を醸し出しており、見ているだけで頭が
しびれてくるようだった。目つきが悪いことを除けば、そいつは完璧
な美少女だった。

「何故私をじろじろと舐めるように見ているのかしら。貴方は遅く起
きたくせに朝から美少女に劣情を催す家畜以下の存在なのかしら」

「朝から冴えてるねえ梨乃さん」

梨乃は、その言葉にふんと鼻を鳴らす。自分で自分を美少女と言っ
ちやうど、こいつもまだ寝ぼけてるのだろう。

「そろそろ支度してちょうだい。遅れちゃうでしょ」

「はいよ。外出てて。それとも俺の生着替え見たい？」

「キモ」

ばたんと勢いよくドアを閉め出ていく梨乃。その背中からは嫌悪
感が溢れ出ていた。

自然とため息が出てくる。今日も相変わらずの毒舌だった。

そう、これが俺の幼馴染である、小鳥遊梨乃である。

容姿端麗、文武両道という、才色兼備を形で表したような人間であ
る彼女は、何の運命のいたずらか、俺の幼馴染だった。

容姿は完璧な梨乃だが、問題はその中身である。彼女は口が悪いの
だ。しかしただ口が悪いだけではない。彼女は人が嫌がる言葉を的
確に選び、心を抉ってくるタイプの口の悪さなのである。

その毒舌は他の追従を許さないほどの勢いであり、彼女に告白した
先輩は軒並み号泣しながら帰っているという噂が立っているほどだ
(ちなみに噂を流したのは俺である)。

これ以上梨乃を待たせるとまたぐちぐち言われるかもしれないの
で、手短かに支度を終わらせ部屋を出る。

梨乃はリビングのソファに座っていた。足をぶらぶらさせながら
朝のニュースを見ているその姿は、部屋に差し込み彼女の横顔を淡く
照らしている朝日も相まって、なんとも言えぬ神秘さを醸し出して
いた。

「……リビングに入ってくるなり私を下卑た目で見る辺り、今日もい
つも通りなのね」

「さーせんさーせん」

見ていることが気に入らなかつたのか、こちらを睨む梨乃。砥石で
研いだのかと疑いたくなるほどに鋭いその視線は、まっすぐと俺に狙
いを定めていた。

時計を見ると、七時になった辺り。まだまだ登校までに余裕はあ
る。

梨乃はテレビの電源を消し、気だるげに言った。

「それより、私生徒会に行かなくちゃだから、早くお弁当作ってよ」

「お前……それが作ってもらおう立場にいる奴の台詞か？」

「うるさいわね……料理でしか私の優位に立てないからって、毎朝同じことを言うのはやめてくれないかしら。PeoPerくんの方がまだ語彙力あるわよ」

「腹立つ奴だな……お前のぶんの弁当作らんぞこの野郎」

「そんなことしたらDVとして警察に通報するわ」

「……はいはい、つくりゃーいいんでしょ」

このまま言い合いを続けてもしょうがないので、弁当を作り始める。容姿や勉強は完璧な梨乃だが、何故か料理だけは小さなころからいくら練習しても出来なかった。

梨乃と俺の家庭は親が家にいることが少なく、加えて梨乃の料理下手ということもあって、自然的に俺が料理を作ることになっている。

梨乃はソファに寝ころんで本を読んでいる。こちらに足を向けて寝ているのでスカートの中身が見えそうだが、肝心の中身はクツションのせいで全く見えない。

がん見しているとまた変態だの劣情を催すなだのと文句を言われそうなので、視線を無理やり移動させる。弁当を作らなければ。

暫くの間、静かなりビングは俺が弁当を作る小さな音と、梨乃が本のページを捲る音で満たされていた。

「ほら、できたぞ」

「ご苦労様。じゃ、行くから早く用意しなさい」

「おっけ、ちよつと外で待っててくれ」

「……ん」

小さく頷く梨乃。そういう素直な動作は可愛らしいので嫌いにならない。結局は俺も可愛さに負けてしまっている。

自分の部屋に戻ると、机の上に散乱している物を鞆の中に無造作に突っ込み、制服を着て外に出る。梨乃はぼんやりと空を眺めていた。

「ごめん、じゃあ行くか」

「あ、私の半径二メートル以内には入らないでね」
「じゃあ先 رفتとけよ……」

今日も俺の日常は変わらない。

いつもの日常……？②

一人で昇降口に入った俺は、靴を履き替え教室に向かう。ちなみに梨乃と一緒に登校をしているところを見られたくないのだと言つてさっさと一人で行ってしまった。思春期を迎えた娘を持つ父親のよくな気持ちを、まさかこんな年齢で味わえるとは思っていなかった。教室のドアを開け席に座る。右斜め前に梨乃の背中が見えた。どうやら本を読んでいるようだった。

まあ俺もそこまで暇というわけではない。鞆の中から宿題を取り出した俺は、少し遅い課題タイムに入ることにした。

順調に問題を解いていると、ふとどこからか視線を感じた。

顔を上げると、こちらを見ていた梨乃とぼつちりと目があつた。梨乃は一度気まずそうに目を逸らしたが、何を思い直したのか立ち上がりこちらに歩いてきた。

「あなた、今宿題をしているの？」

「悪いかよ、昨日やるの忘れてたんだよ」

「呆れた。学生の本業は勉強でしょう。あなた、何をするためにここに来ているの？ まさか青春を謳歌するなんて間の抜けたことは言わないでしょうね」

「……はいはいはいわかったからごめんなさいごめんなさい」

こちらに来て何を言うのかと思えば、いつも通り悪口だった。

若干うんざりした俺は、忙しいということもあつて少々おざなりな態度で梨乃に接する。梨乃はそんな俺を見て目を細める。

「……何、正論ぶちかまされてキレてるの？ キモ」

「……」

このままいつも通りの悪口大会になつては勉強に集中が出来ないので、無視することにする。怒られるかもしれないが、後でジュースでも買ったら機嫌は直るだろう。

梨乃は何も答えなくなつた俺をしばらくの間、凍えるような目つきで見っていたが、すぐに踵を返し自分の席へと帰って行った。

やけにすんなりと帰ったことを疑問に思いつつ、宿題を進める。すると、ペンを走らせていた俺の頭に、何か軽い物が置かれた。反射的に手で頭を抑えると、頭の上に乗せられていた物が目の前に落ちた。ノートだった。

目を上げると、相変わらず冷たい目をした梨乃が立っていた。視線を落としノートを見ると、可愛らしい字で小鳥遊梨乃と書かれている。どうやら今俺の頭の上に乗せられたこのノートは梨乃の物らしい。

梨乃はじつと、何も言わずに俺を見ている。

「えーっと……これ、写させてくれるのか?」

「……好きにしなさいよ」

俺の言葉に、珍しく毒を吐かない梨乃。その表情は、どこか気まずそうにも見えた。

だが梨乃の表情は関係ない。ノートが一番大切だ。

「マジ!? 感謝! あとでなんか奢るわ!」

「……………別にいいわよそれくらい。ていうかがつつきすぎ、キモイ」
珍しく毒を吐かないと思っていたが、どうやら気まぐれだったらしい。ノートを抱きしめながら涙を流す俺に、梨乃は先ほどと変わらないう口調で毒を吐いてきた。さっきのしおらしさは何だったんだ。いや別にしおらしくはなかったけど。

梨乃はそれだけ言いたかったのか、すぐに自分の席に帰って行った。

俺はそんな梨乃を不審に思いながらも、すぐにノート写しの作業に移っていった。



放課後を告げるチャイムが鳴った。それと同時に教室の空気が弛緩する。一日のほとんど惰眠を貪っていた俺は、大きく背伸びをして帰宅する準備をする。

そんな俺の肩を、誰かが叩く。振り返ると、少し背伸びをした梨乃

はにっこりと笑みを浮かべてこちらを見ていた。

梨乃が笑みを浮かべているということは、何か良くないことが俺におこるという前触れである。俺は梨乃が何かを言う前に捲し立てる。

「あー、そういえば今日スーパーの特売日なんだよな！ だから早く買いに行かなきゃ！ だから俺はもう帰るわ！」

「スーパーなら後で一緒に行きましょう。二人の方が効率がいいわ。そう、二人の方が効率いいのよ？」

「……………」

がしりと、肩を掴まれる。どうやら逃げ場はないらしい。俺は人がいなくなり始めた教室を見渡して、大きくため息をついた。

「あなたには生徒会の手伝いをしてほしいの」

「生徒会の？」

「二回も言わせないでよこの能無し。普通に書類をチェックして仕分けるだけの簡単な作業よ。生徒会のメンバーが忙しくて、私しか働ける人がいなかったのよ」

「勘弁してくれよ……体育で疲れてるんだって……」

「私も体育やったわよ。男なんだからしっかりしてちょうだい」

「へーいへーい」

窓から差し込む夕日で蜜色に染まるリノリウムの床を歩きながら、梨乃はそう言った。しかし、俺は陽光に照らされ黄金色になった梨乃の髪を眺めるのに忙しかったので、全然聞いてはいなかった。それを言えば怒られるので、とりあえず相槌を打っておく。

梨乃は生返事しかない俺を不審に思ったのか、こちらを向いて首を傾げた。

「ちゃんと聞いているの？ そのピンボール並の脳みそをちゃんと働かせてちょうだいよ」

「お前はピンボール並の脳みその男に生徒会の労働をさせようとしているのか」

「猫の手も借りたといって諺があるのよ。無知蒙昧なあなたは知らないでしょうけど」

「いい勉強になったよ」

「死ね」

「なんで？」

そんな軽口（？）を叩きながら歩いているうちに、生徒会室についた。

扉を開けると、かすかに埃の匂いがする。

梨乃は生徒会室の最奥に設置されている机、生徒会長用の机に座ると、書類を引き出しから引っ張り出した。

「こんなやつが生徒会長つて、やばいよな……」

「言葉に出てるわよ間抜け。それに、あなただつて私に投票したんでしょ？」

「いや、俺違う人に投票したと思うわ」

とりあえず梨乃には票入れたくなかったし。

すると、俺の言葉に梨乃がぎろりとこちらをにらんだ。

「は？ あなた、私を選ばなかったの？ じゃあ誰を選んだのかしら」

「えーつと……確か先輩だったような……」

「……死ね」

「なんで？」

「死ね」

「……」

何だか不機嫌である。触らぬ神に祟りなし。いや、梨乃の場合あちらから触ってくるが。

梨乃は無造作に書類をこちらに投げつけると、一言「これやって」とだけ言って自分もなにやら書類にペンを走らせ始めた。

俺はというと、体育の疲れが今に出て来たようで、落ちてくる瞼と必死に戦っていた。

仕事もせずに船を漕いでいた俺を見て、梨乃は呆れた表情になった。いつも冷めた表情なので、何気に珍しい光景だった。

「ねえ、私から頼んでおいてこんなこと言うのもアレなんだけど……あなたホントに使えないわね」

「悪かったな……疲れてんだよ」

「私だって疲れてるわよ……ほら、さっさと働いてよ。一緒にスーパー行くんでしょ？」

「……はいはい……」

重い瞼をこじ開け、書類に目を通す。意味は全く分からないが、とにかくハンコを押しとけばいいだろう。

梨乃が若干呆れた目でこちらを見ていたが、無視。第一生徒会以外の人間ができる仕事ではないのだ。

静かな生徒会に、俺のハンコを押す音だけが響く。

……俺の音だけ？

生徒会長の机を見ると、梨乃は何をするでもなくぼうっと俺の方を見ていた。

「待て、お前もう終わったのか？」

「あたりまえじゃない……私を舐めないで」

「じゃあお前ひとりでやった方が早かったんじゃないの？」

「……別に、私の勝手でしょ」

俺の勝手はどこに行つた。

「……何よ、アキ君は私と一緒に仕事するの嫌なの？」

「そういうことじゃないが……ていうか梨乃、なんでまた昔の呼び方を……」

梨乃はうつらうつらと頭を揺らしている。どうやら彼女も体育のせいで疲れているらしかった。

「別に……いい、じゃない……」

「疲れてるんならそのソファで眠つとけよ。俺終わらせとくから」

「うん、ありがとう……」

「マジで気持ち悪いくらい素直だなお前……」

ずっとそうしてたら可愛いのにという言葉は飲み込んでおく。なんだか怒られそうである。

梨乃はソファにこてんと倒れこむと、小さな寝息をたてながら寝始めた。どうやら本当に疲れているようだ。まあ、生徒会の仕事やら学業やらで忙しいのだろう。

「……さて、やるか……」

梨乃が寝たことで、俺を邪魔する者はいなくなった。これで存分に仕事に集中できる。

少しストレッチをして、仕事に取り掛かる。この様子だと後三十分もあれば終わりそうだ。ハンコを手にした俺は、大きく息を吸って仕事を再開した。



寝ていた。

ぐっすり寝ていた。

あと三十分で終わるとか言っときながらたっぷりと惰眠を貪っていた。

俺の目の前には全く手がつけられていない書類の山がある。

幸いなことに、まだ梨乃は眠っている。起きる前にさっさと書類を終わらせてしまおう。書類の山から一枚紙を取り出し、ハンコを押す。するとそんな俺の肩に、誰かが手を置いた。

いや、誰かなんて白々しい。この場にいるのは俺を含め、二人しかないのだから。

ゆっくりと振り返ると、それはそれはいい笑顔をした梨乃が立っていた。笑っているが、こめかみに青筋が浮かんでいる。

「ねえ、今何時だと思う?」

「……俺の予想だと七時くらい」

「ええそうよびったりよ」

「あ、そうなの」

「……で、この書類の山は何かしら」

「なんだと思う?」

「アキ君が終わらせなかった仕事の数々かしら?」

「ええそうよびったりよ」

「死ね」

「ごめんなさい」

大きなため息をつく梨乃。これほどため息をついているのだ、彼女

の中に幸せは残っていないだろう。

「まあすぐ終わらせるよ。待つとけ」

「……私も手伝うわ」

「無理すんな。寝起きだろ」

「……あなたよりかはマシだわ」

「まあそうだな。……あ、呼び方直したのな」

「……呼び方？」

首を傾げながら俺の横に座る梨乃。ふわりと甘い香りがした。

寝起きから覚醒し始めているのか、先ほどまでのアキ君という呼び方は直っている。しかしまだ眠いようで、書類とにらめっこしながらも、その瞳はどこかとろんと現実世界にいないようだった。

「あとちよつとだな」

「……あなたがもつと早くしてたら、こんな遅くまで働く必要はなかったのだけれどね」

「はいはいすんません」

「まったく、もつとしっかりしてよね。そんなんで将来どうするつもりなのかしら」

今の梨乃は眠気のせいで心の中の声までも呟いてしまっているようだ。それにまだ覚醒し終えていないので、いつもの毒舌もなりを潜めている。

梨乃はぺらぺらと喋りながら、それでも手は休めずに作業を進めている。これが俺と彼女の違いなのだろう。

返事をしない俺を不審に思ったのか、梨乃がちらりとこちらを見る。

「ちゃんと聞いているの？ まったく、あなたが大きくなってもこんなだったたら、私も困るわよ」

「……お前にや関係ないだろ」

ぎろりとにらまれる。寝ぼけているとは思えないほどの眼光だった。

「関係あるわよ……」

「関係あるのかよ」

「……将来旦那がこんなだったら、私まで色々言われそうじゃない」
「はいはい、そらまあすいませんでした……………はっ」
「……………」

ぴらり、手に持っていた紙が指から滑り落ちた。

何を言われたのか分からなかった俺は、素っ頓狂な声を上げ梨乃の顔を見てしまう。

梨乃も自分自身が何を言ったのかわかっていなかったらしく、ぽかんと口を開けてこちらを見返している。

しかし、だんだんと彼女の顔が赤く染まっていく。自分が経った今何を口走ったのか気づき始めたのだろう。いや、正確には先ほどからだ。

今やリングよりも真っ赤になってしまっている梨乃の顔を見ながら、俺も自分の顔が熱くなるのを抑えられなかった。

「今お前……………なんて……………」

「い、いやっ違うから！ 何勘違いしてんの!? キモイ!!」

「いやけど……………今お前旦那が——」

「し、知らないから！ 知らないから！」

珍しく慌てた様子の子の梨乃は、顔を真っ赤にしながら立ち上がり、そのまま部屋を飛び出していった。残された俺は、熱くなった顔を手で扇ぎながら、天井を見上げる。

ほんつと、勘弁してくれ……………」

「結局、仕事もスーパーも一人きりかよ……………」

一人愚痴るが、俺の頭はそんなことなど考えていなかった。

朝から色々と言ってきたが、そのすべてはこの一言で収まってしま

う。
俺の毒舌幼馴染が稀に見せるデレが可愛すぎて辛い。

新しい日常

目を覚ます。目の前に広がるのは見知った天井。

身体を起こした俺は、軽い眩暈と戦いながら窓の外を見た。いつもの癖で早起きしてしまつたせいで、外には誰もいない。

それもそのはず、今日は日曜日である。日曜の早朝に外を歩いている奴なんかそうそういないだろう。

窓を開けると、そこそこ涼しい風が部屋の中を洗うように雪崩れ込んでくる。肺の中まで洗われている気分だった。

ちらりと、隣の家の上階の窓を見てみる。カーテンをぴたりと閉じられたその部屋は、忌々しくも可愛らしい俺の毒舌幼馴染、小鳥遊梨乃の部屋である。

あの日——梨乃が口を滑らせよくわからないことを言ったあの放課後から既に数日が経った。それ以来梨乃は俺と登校をしないようになり、教室でも話しかけてこなくなつた。時々視線を感じるが、顔を上げた瞬間にさっと逸らされる。元々あまり好かれていないという自覚はあつたが、ついに嫌われの域に突入してしまつたようだ。

しかし俺としては、いつもの日常が崩れていくというのは好ましくないことで、何なら早く梨乃にはもとに戻ってほしいと思つている。いつも聞いている毒舌が聞けなくて寂しいとかそういうのではない。全くない。

再び俺を襲つてきた眠気に逆らうことなくベッドに倒れこむ。俺をしつこく起こす奴がいないので、ゆつくりと二度寝もできる。あれ、これいつもより快適じゃね？

「けどやっぱ……なんか、違うな……」

眠りの坂を転がっていく意識の中、快適の中に潜む違和感を見つけ、俺は小さくつぶやくのだった。



夢を見ていた。

ずっと昔の夢、俺がまだ幼かったころの夢。

公園に行つて、一人でずつと遊んでいた。砂場だけが俺の友達だった。

そんな俺に、声をかける一人の少女。そのころはまだ肩にも届かないほどに短い髪を揺らし、くいと顎を上げ、蔑むように俺を見ていた。

『一人で何してるの』

彼女はそう尋ねた。問いかけられているのだと気づくのに数秒を要するほどに、刺々しい問い方だった。

『遊んでる……?』

自然と疑問形になっていた。

『一人で?』

『一人で』

『楽しい?』

『そんなに』

軽く交わされる会話。意味なんてないが、久しぶりの肉親以外との会話に、俺は緊張していた。しかし彼女はそんな俺のことなど気にもせずに、どこどかかと砂場に入り込んできた。

『じゃ、一緒に遊びましょうよ』

『……うん』

少女は俺の横に座ると、ふつと微笑んだ。それは暖かな笑みではなかったが、決して冷たいというわけではなく、ひんやりと俺の心を冷やした。

そして俺たちは友人になった。いや、幼馴染といえいいのだろうか。

あの頃は、今と違った。少女——は毒舌を吐かずに、少々冷たいものの優しく俺に接してくれていたはずだ。

——きなさい

そういえば、梨乃はいつから俺に対して冷たい態度を取ってきたんだっけか。確か、高校生になる前からはもう既にあんな感じで毒舌を

吐きまくっていたような気がする。しかし、はっきりとその時のことを思い出せない。脳があまりにも恐ろしい思い出なので思い出したくないとワガママを言っているのだろうか。

——いい加減に……くれ……しら？

それとも、何かもつと他に大きな理由があるのだろうか。俺は何かの魔法にかかっている、梨乃はその副作用か何かで俺に毒舌を吐いているとか。

……いや、それはさすがにないか。

脳内に浮かんだバカバカしい考えを捨て去る。高校二年生にもなってなんて恥ずかしいのだろうか。

それよりも、先ほどから何か声が聞こえる。どこか遠くから、何かの壁を通して聞こえてくるような、くぐもった声だった。

まあ、気にすることでもないか。

俺は目の前で砂の山を作っているかっつての日の梨乃を見る。無表情に見えるが、その瞳は作り終わった砂の山の出来に輝いていた。

何だろう……いつもきつい態度の梨乃ばかりしか見ていないから、こういう無邪気な梨乃がとても……何だろう、新鮮に思える。

『何作ってるの？』

そう尋ねると、少し口元を緩めていた梨乃ははっとこちらを向いて、無表情に戻った。

『別に、あんたには関係ないでしょ』

その、幼いころの梨乃の、小生意気な喋り方に思わず笑みを零してしまう。

『その砂の山、すごい綺麗だね』

『……！ あんた、なかなかわかってるじゃない』

『それはどうも』

『やっぱりなんといってもこの山の形よね！ このカーブがとっても綺麗だわ！』

——んにしない——わよ

砂の山を褒められたのが嬉しかったのか、梨乃は無表情を消し、笑みを浮かべながら熱弁を始めた。やはり、昔の梨乃である。

ああ、ほんと……………

「梨乃は、可愛いよなあ」

ばちーん！

視界にマズルフラッシュにも似た光が飛び散る。

飛び起きると、頬が熱いくらいの痛みを帯びている。驚きながら周りを見渡すと、俺のベッドの傍に、見慣れた——ここ数日は見ていないが——顔があることに気が付いた。

何故か顔を赤くした梨乃は、慌てた様子で俺を睨みつけていた。

「あれ、お前俺の部屋で何してんの」

「……………あ、あんた……………今自分が何言ったのか、わ、わかつてんの!?!」

いつものように、冷静沈着な梨乃はどこにもおらず、そこには顔を真っ赤にしてわたわたとしている美少女だけがいた。

「何言ったかって……………お前俺の部屋で何してんの?」

「それじゃないわよこの間抜け! その前に言ったことよこの馬鹿!」

「なんかいつもより毒舌の語彙力が貧困だなあ……………ていうか、その前? 俺寝言でなんか言ってた?」

「ね、寝言……………」

顔を赤くしたまま、梨乃は呆然とこちらを見た。どうやら俺は本当に何か寝言で言っていたらしい。そう考えると、なにやら夢を見ていたような気がする。忘れてしまったが。

梨乃は寝言と聞き少し肩を落としていたが、どうやら俺の寝言はそれほどに彼女を慌てふためかせるほどの威力を持っていたらしい。

「俺、何言ってたの?」

「へえっ?!? いや……………なんでもないわよ」

「何今の声。ウルトラマンかなんかの親戚なお前? ていうか、そんな言葉にも出来ないような寝言発してたのか俺」

「え、ええそうよ。それはもうエロもグロも裸足で逃げ出すようなおぞましいことをあなたは口走ってたのよこの変態」

「マジかよ」

「マジよ」

少しずつ落ち着きを取り戻してきた梨乃は、それでも赤い顔のまま言った。何やら嘘くさいが、まあ問い詰めるほどのことでもない。

それよりも俺は、久しぶりの梨乃の毒舌を味わっていた。やはり一日一度は毒舌を聞いておかないと安心できない。

……………あれ、調教されてね？

「ていうか、お前はなんで俺の部屋に来たんだ？」

「ああ。そういえば忘れてたわ。誰かさんの変な寝言のせいだ」

「はいはいすんません」

「お腹空いたからご飯作ってほしいの」

「お前のご飯を作ってほしいから幼馴染をひっぱたいて起こすのか……………」

「た、叩くつもりはなかったし、それは悪かったわよ……………。いつまでも引っ張らないでちょうだい女々しいわね」

「へいへい……………作るからリビングで待つてろ」

「……………」

こくりと頷いて外に出る梨乃。ここ数日はそつけない態度を取っていた彼女だったが、どうやらもう元に戻ったらしい。

まあ、もう一度くらいあのしおらしい梨乃を見たい気もしないわけではないのだが。

そんなことを考えながら、俺は階段を下りていく。新しい日常の始まりだ。

ダラダラするだけの話

「で、なんでお前いきなり俺の家に来たわけ？」

もぐもぐと、パンを頬張っている梨乃に尋ねる。朝食を作ろうと思っていたのだが、冷蔵庫の中は空っぽだった。買い出しするのを忘れていた。というわけで、今朝の朝食はパンにジャムを塗っただけというお手軽なものだった。

梨乃はごくりと、口内にあったパンを嚙下し、冷たい目でこちらを見た。

「さっき言ったと思うのだけれど。お腹空いたから朝ご飯作れって」

「いやそうだけど、パンしかないし……パンだったらお前の家でも作れるだろ。っていうか花梨ちゃんは？」

花梨ちゃんというのは梨乃の妹である。高校一年生だが、俺らとは別の高校へ通っているの、最近はあまり顔を見れていない。ちなみに彼女も料理ができない。

梨乃は、パンを皿に置き、こちらを見た。

「花梨は友達と遊びに行ってるわ。それと、私がトースターを使えると思っていたのかしら？」

「いや、普通に思ってた。ていうかお前、トースターも使えないのか？」

あんなん特にやることないだろ」

「熱いじゃない」

「ゆとりの悪いところ出てるぞ」

「あら失礼」

そこまで言うと、まるでもうこの会話に興味はありませんとも言いたいばかりに再びパンにかぶりつく梨乃。綺麗な桜色の唇が咀嚼するたびに動くのを見るのは、なんだか心地が良かった。

「口元にパンくずがついてるぞ」

「あら、あなたの分身が出来てしまったわ。ほら、ゴミ箱にお帰り」
「余計な一言が多いんだよなあ……それで、今日はどうするんだ？」

俺の言葉が無視し、牛乳をゆっくり飲み始める梨乃。白くきめ細かな喉がごくりごくりと動くのを、俺はぼうつと見ていた。

「どうするって、どういうこと？ きちんと日本語を話してほしいわ」「さーせんさーせん。朝食食ったら帰るのか？」

「別に帰ってもいいけれど……どうせ家に誰もいないし、あなたの部屋で本でも読んでおくことにするわ」

「お前、もう俺の部屋にある本大方読み終わってるだろ」

「あなたには関係ないでしょ」

朝食を食べ終わったのか、梨乃は立ち上がり食器を洗い場に置いた。

「あ、俺が洗つとくよ」

「やつと自分がすべきことが何なのかを理解し始めたようね。……と言いたいところだけど、さすがにそこまでやってもらうわけにはいかないわ。私がやっておく」

珍しく、梨乃は自分で皿洗いを始めた。キッチンで彼女の後姿を見ることなんて珍しいことなので、思わずじろじろとその肩甲骨あたりを眺めてしまった。

「……あまり、その気持ちの悪い視線をぶつけないでくれるかしら。クソ気持ち悪いわ」

「女の子がクソとか言っちゃいけません」

「ゲロキモイわ。死ね」

「……あ、はい」

暖簾に腕押し。馬の耳に念仏。梨乃に説教。

俺は諦め、テレビを見ることにした。朝のニュースがつまらん食レポをやっているところだった。

買い出しも行っておかないとなあなんて考えていた俺は、ふと梨乃に尋ねた。

「なあ、梨乃」

「……………」

無視。

「梨乃ちゃん？」

「……………」

無視。

「梨乃さま？」

「……………」

無視…………。

「可愛くて愛らしい梨乃ちゃま？」

「聞こえてるからその気持ち悪い呼び方やめてちょうだい」

「なら返事しろよ！」

「別に気にせず話せばいいじゃない。あと、その汚い声で叫ぶのやめてもらっていいかしら。気持ち悪いわ」

……………。

本当にこの幼馴染は毒しか吐かない。まあ別に、もう慣れたことである。

俺はため息を吐いて、尋ねた。

「最近なんで俺のこと避けてたん？」

「がっしやーん！」

俺がそう尋ねた瞬間、梨乃が手を滑らせ食器を落とした。けたたましい音が響く。梨乃の肩がビクンと跳ねた。

「おい、大丈夫か!？」

「ご、ごめんなさい。落とすつもりはなかったのだけれど」

「別にいいよ食器くらい。それより、怪我は？」

「ないけれど…………ごめんなさい」

「なんだお前、珍しくしおらしいな」

「…………わ、私だって自分が悪かったら謝るわよ」

しゅんと肩を落とす梨乃は、なんだかいつもより小さく見えて、可愛らしかった。

「割れた食器は俺が片付けとくからさ、梨乃はテレビでも見て早くいつもの毒舌に戻ってくれ」

「…………うん。ごめんなさい」

「いや、お前がそんなに大人しいとホントに気持ち悪いから早く元に戻ってくれ」

「わかったわよ……」

「すぐごと、背中を丸めながらソファへと歩いていく梨乃。その背中からは罪悪感が滲み出ていた。」

「割れた食器を片付け、冷蔵庫の中身を確認する。すると、後ろから控えめな梨乃の声が聞こえて来た。」

「それで、あんたの質問……なんなの？」

「質問……？ ああ、なんか二日か三日くらい前からなんか不自然に避けられてたからさ。なんだったのかなって」

「理由はもちろんあの放課後のことなのだろうが、それだと何故俺が無視されていたのかがわからない。よくわからないことを言ったのは向こうなのだ。」

「梨乃は、じつと考え込み始めた。心なしか、その頬はほんのりと赤い。」

「別に、無視してたわけじゃないけど」

「嘘つけ。いつもは俺を叩き起こして一緒に登校する癖に、ここ数日は一人だったじゃねえか」

「気分転換よ」

「じゃあ教室で俺と全く目を合わせなかったのは？」

「気分転換よ」

「お前の気分の転換の仕方、変わってんだな」

「余計なお世話よ」

「ロボットのようには繰り返す梨乃。そっぽを向いているので、その表情は窺い知れない。」

「まあそれならいいけど……じゃあなんで今日はいきなり来たんだよ。昨日まで朝食も食ってなかったのに」

「わ、私の勝手でしょ？ ……あなたの部屋にある、あの……汚い人形に会いに来たのよ」

「人形？ ああ、あのペンギンみたいなやつか。あんなに会いに来たんかお前」

どうやら、梨乃は俺の部屋に飾ってある人形のことを言っているようだ。小学生くらいの時から置いてあるので、今では俺の部屋の風景の一つとなっている代物である。

梨乃はこちらを見て、片頬で笑った。

「あなたよりかは可愛らしくていい子だと思うけれど。ていうか、あの人形に会いに来る以外、あなたの家に入る理由なんてご飯くらいしかないのだけれど」

「人形さんに負ける俺って一体……。ていうか、そんなに可愛いんならお前にやるよ。俺別にいらんし」

ぴくりと、梨乃の表情が動く。なんだか俺の言葉が気に入らなかつたらしい。

「……あなたの部屋の空気がしみ込んだ、汚い人形なんていらんわ」「お前その汚い人形に会いに来たんだろ」

「……とにかく、あなたの人形なんていらんし、持っていくつもりもないわ。時々見に行くくらいがちょうどいいのだし」

「へーいへい。あ、俺後で買い物に行くから、部屋で本でも読んでくれな」

「私に一人で暇を弄べって言うの？ 随分とまあ甘く見られたものね」

「一人で暇つぶしできないの?」

「寂しくて死ぬわ」

「兎かな?」

「……………」

じつくりと考えこみ始める梨乃。何やら葛藤しているらしい。

たっぷり十数秒間ほど考え込んだ梨乃は、不意に顔を上げ、言った。

「私もその買い物についてくわよ」

「……………」

「何が」

「二人で一緒に買い出しって、デートみたいじゃん」

「何意識してんの? キモ。あなたがそんな思春期の男子みたいな反応するなんて予想してなかったからキモさ倍増なんだけど」

「俺思春期の男子だぞ」

「ちなみに今現在私の中のあなたのキモさランキングは暫定三位よ」

「聞いてねえよ。っていうか、あんなに色々言ってたのに一位じゃないのな。なんかそれだけで嬉しくなってくる自分が悲しいわ」

「ちなみに二位はゲジゲジ虫よ」

「ガチのやつじゃん！俺あの虫と同列って嫌なんだけど!？」

「そして栄えある一位は左隣に住んでるゴミボの男ね」

左隣に住んでいるゴミボの男？

俺は首を傾げ梨乃の左隣の住人を思い浮かべる。

確か、梨乃の左隣の家って――

「……俺じゃん！左隣の家って俺の家じゃん！ランキングほぼ独占しちゃってんじゃない！ゲジゲジより気持ち悪い認定いただきたいやつだよ!!」

「やかましいわね。買い物行くんでしょ。ほら、さっさと支度しなさいよ」

「ええ……？はあ、まあいいや。じゃあ用意しとくから外で待っててくれ」

「死ね」

「最近なんか辛いことあったの？」

相槌代わりに毒を吐く輩なんて初めて見た。

梨乃は特に何も言うことなく、玄関へと歩いていく。

俺はその背中を見ながら、大きいため息をついた。

頭の中に浮かぶ疑問は一つのみ。

「……これ、デートってカウントしてもいいのか？」

もちろん、梨乃の意見がどうであれ、カウントするつもりである。

デート回

日曜日の昼下がり、天気は良好。俺と梨乃は、二人並んでスーパーマーケットまでの道のりがあるいていた。デート（仮）である、ちなみに梨乃は先ほどから熱心に携帯の画面を眺めているので、デートっぽさは皆無だ。

「冷蔵庫の中、何があったっけ？」

「……………」

ちよつとでもデートっぽい雰囲気を出そうと声をかけてみるが、無視。どうやら携帯に集中しているようだ。俺は一人寂しく、冷蔵庫の中身を思い出す。

調味料はあつたし、飲料水とかもあつた。とりあえず野菜と肉、後はおかずを買えばいいだろう。

俺は相変わらず画面を食い入るように見つめてる梨乃をちらりと見る。一体何をしているのだろうか。

「なあ梨乃、せつかく二人で出かけてるんだから、もうちよつと話し合おうぜ」

「…………デートみたいに言うのやめてよ。ただの買い出しなんだから」
今度はきちんと返事が来た。やはり会話というのはこうでなければ。言葉のキャッチボールの球の独り占めダメ、ゼツタイ。

しかし返事が来たと言ってもそれはシンプルなもの。どうやら俺に興味はないらしい。ていうか、ホントに何やってんだ？

「デートみたいなもんだろ。年頃の男女が二人で出かけてるんだから。梨乃ももう少し素直になってもいいんだぞ？」

「あ、ちよつとそこの公園寄るわね。先行っててもいいわよ」

「台無しだよ」

梨乃は携帯に引つ張られるように、公園へと歩いていく。何か公園にあるようだ。

「マジで何やってんだ？」

「うるっさいわね、レイドバトルに集中できないから黙っててくれな
いかしらっ。」

「ポケ○ンG○かよ！俺とのデートよりゲームの方が大事なの!？」

「アーマードミ○ウツーは期間限定なのよ」

「知るか!」

公園の前に立ち止まった梨乃は、ポチポチと携帯をいじり始める。どうやらそのミ○ウツーとやらと戦っているようだ。画面は見えないが、必死に指を動かしているのはわかる。

「……何分くらいかかりそう?」

「え、まだいたの? 先行っていいって言ったじゃない」

どうやら本気で俺がいたとは思っていなかったらしく、目を丸くさせている梨乃。

「ポケ○ンG○に負けたっていうのは何か悔しいから、ゲームに熱中する彼女を温かく見守る彼氏役になるわ」

「デートじゃないって言うてるでしょ。あなた如きが私とデート出来ると思ってるの?」

「可能性はゼロじゃないんだぞ」

「知り合いと行くカラオケの一曲目でおしりかじり虫を歌うくらいの確率でなら、あるかもね」

「ゼロだな」

「……………」

携帯に噛みつく勢いで画面を眺める梨乃の背中が、なんだかとても遠く思えた…………。



数分後、苛立たし気に携帯を仕舞った梨乃。どうやら終わったらしい。

「勝てたのか?」

「……あら、あなただったの。子供たちが跨ってびよんびよんするパンドの乗り物みたいな遊具だと思っていたのだけれど」

「こんな場所に設置されてたら戸惑うわ」

現在、公園の入り口前。

「で、終わったのか?」

「見りゃわかるでしょ。さっさと行くわよ」

何だかご機嫌斜めな梨乃。どうやら負けたりらしい。

「そんなに強いのか？ そのアーマード何たらっての」

「一人で勝てる強さじゃないわね」

「じゃあフレンドとやればいいじゃん」

「私にフレンドがいると思っていたのかしら。だとしたらあなたの頭は相当お粗末だと思うのだけれど」

「おう毒舌と見せかけた自虐やめーや」

「……………」

「んで一人で傷ついてんじゃねーよ…………」

とぼとぼと肩を落として歩く梨乃がどこか寂し気で、俺は思わずぽつりとつぶやいた。

「…………何だったら、俺がインストールしてフレンドになってやってもいいけど」

「あ、ごめんなさい私トレーナーレベル20以下の雑魚とはフレンドにならない主義なの」

「悪かったな雑魚で！」

だからフレンドいねえんだよ。

すると梨乃は、俺の少し前を歩きながら喋り出した。

「ちなみにもし私があるたとデートしているとするとするわね」

「おう」

「仮に、ね。もしもの話よ？ 万が一にもあり得ないけど、わかりやすくするために話してあげてるだけだからね？」

「さっさと進めろー！」

くるりと、前を歩いていた梨乃がこちらを振り向く。その表情は、空に輝く太陽のように綺麗だった。

「仮にもしも万が一にもあり得ないけど百億歩譲ってあなたとデートしているとするわ。もしその場面でチャライ男が私をナンパしてきたとして、そのチャライ男のポケオンGOのトレーナーレベルが36以上の場合迷うことなくあなたをほっぽり捨ててその男についていくわ」

「いい表情でえげつないこと言われた！」

ていうか、あくまでポケオンGO基準なのな……。
梨乃はそれだけ言って満足したのか、再び前を向いて歩き始めた。
俺は家に帰ったらインスタツールしてみようかなあなんて思いながら、その背中を追うのだった。



買い物シーンは面倒くさいので割愛。

俺はビニール袋片手に、梨乃と帰り道を歩いていた。日は傾き始めており、真つ赤な太陽が地平線にとっぷりと浸かっていた。ちらりと横を見ると、真つ赤に染まる梨乃の横顔が。物憂げに下を俯くその姿は、まるで一枚の絵画かと疑ってしまうほどに儂く美しかった。下を向いている理由はポケオンGOだが。

「今日はカレーでいいだろ」

「材料買った後に尋ねないでよ」

「それもそうだ。花梨ちゃんは今日うちで食べるの？」

「多分」

住宅街を歩いていると、どこからともなく夕飯の匂いがしてくる。無性にお腹が空いてくる匂いだ。横を見ると、梨乃も匂いの出所をきよろきよろと探していた。その光景がなんだか微笑ましく、俺はつい笑みを漏らした。

「……さつさと帰るか」

「え、何そのにつこり笑顔。キモッ」

「……………余計なお世話だよ」

本当に……………こいつは全てを台無しにする。

「今の笑顔何？ マジで気持ち悪かったのだけれど。平成が一番キモかったわ」

「時代に取り残されてるぞ。今は令和だ」

「……………令和？ ……もしかして、平成はもう、終わった、の……………？」

「なんだそのコールドスリープから目覚めたばかりで平成が終わっ

たことを知らない患者みたいなりアクションは。お前令和発表の時俺の部屋でテレビ見ながらポテチ食ってたじゃん」

「……しあわせバター味を馬鹿にしてんじゃないわよ！」

「誰もしてないよ!?!」

蜜色に染まる住宅街の壁に、俺たちの声が響いていく。

こうして、俺と梨乃の買い物デートは、特に問題もなく終わっていったのだった。

くおまけく

「ねえ花梨。今度の休みに一緒にカラオケに行かない？」

「え、珍しいね。どうしたの急に？」

「ちよつと、カラオケに行つて歌わなきゃいけない歌が出来たから」

「何それ、誓いでも立てたの？」

「まあ、そんなところよ……」

くおわりく

七夕

七夕。

それは、離れ離れになった織姫と彦星が年に一度だけ天の川を越えて再会出来る日。それに便乗した汚らしい人間が、あわよくば自分たちの願いも叶えてもらおうとパンダから笹を取り上げ願い事を吊るし上げる汚らしい行事。

せっかく巡り合えた織姫と彦星はガン無視。こいつらを寿ぐ日ではないのかと、商店街を歩くたびに目につく笹の葉と、それにぶら下がった大量の短冊を見て俺は思う。

まあ、人間なんて自らのエゴでしか動けない生物なのだ。仕方ないと言えば仕方ない。小さい紙一枚で願いが叶うと思っている辺り、やはりそんな浅ましさが露呈してしまっている。

がさがさと、大きな笹を抱えながら、俺はそんなことを考える。手には数枚の短冊。今から俺は、我が家に笹を持ち込み、七夕を祝う準備をしているところだ。

さて、どうしてこんなことになったのだろうか。

別に回想に移る必要もない。簡単な理由だ。商店街で買い物をしている俺に、知り合いの店主が余った笹を押し付けてきただけだ。青春を謳歌しろだのとよくわからないことを言われ、強引に押し付けてきた。別に七夕という行事を見下しているわけではなかったのだが、どうやら周りからはそう見えてしまっていたらしい。

「お願い、どんなのにしよっかなー」

笹を肩に担ぎ食材と短冊を違う手に握る俺は、周りの目からはさぞ変人に見えただろう。実際、いろんな人から奇怪なものを見る目で見られた。ていうか、近所に住んでるんだからそういう目はやめてほしい。

そんなこんなで帰宅。ドアを開けると見慣れた靴が見えた。黒を基調とした小さなスニーカー。男物ではない。

どうやら梨乃が暇つぶしで来ているらしい。

まあ、それはわりかしどうでもいい。最近は二日に一回のペースで

俺の家に来ているので、あまり珍しい光景ではなくなっていました。箆を玄関に置く。さて、どこに飾ろう。

庭は短冊を付けるのが面倒くさいし、いちいちサンダルを履いて外に出るのが億劫だ。かと言って室内は何か汚れそうでありあまり好ましくない。

「つてなると、残されてる場所一つしかないよな……」

サンダルを履く必要がなくて、なおかつ室内ではない。

俺の部屋のベランダしかなさそうだ。

我が家の外観が騒々しくなるので出来ればやりたくないが、他に場所がないのでしょうがない。

俺は大きなため息をついて自室へと帰っていった。



「あら、パンダが帰ってきたわ」

ドアを開けた俺を見て、梨乃が言った。

「うっせ。ていうかお前の方がパンダみたいな恰好してんじやん」

今の梨乃の格好は白いTシャツと黒い短パン。漫画を読んでいる最中だったのか、片手に漫画本を持ってベッドに寝ている（俺のである）。首だけをベッドから放り出してこちらを見ている体勢が、彼女のパンダっぽさに拍車をかけていた。いや、どっちかといったらナマケモノだけど。

「パンダ年に生まれたからかしら」

「干支にパンダはいない」

「それで、なんなのその箆は」

漫画を本棚に片付けながら、梨乃は尋ねた。

何だ、と言われても説明が難しい。

「もらってきた」

「いいわね。これで新しい話相手が出来たじゃない」

「いや箆とは喋らんわ。七夕用だよ」

「七夕……ああ、そういえば今日だったわね」

「忘れてたんかよ……」

「ふん、盛り過ぎたせいで左遷された猿の話なんて覚えておく価値もないでしょ」

「彦星になんか恨みでもあんの？」

本棚から違う漫画を引つ張り出しながら吐き捨てた梨乃の横顔は、彦星に対する怒りで塗れていた。お前、何されたんだよ……。

くるりと、梨乃が急にこちらを向いた。

「ちなみに私が織姫だとするわ」

「いきなり何が始まったんだ？」

「……私が織姫だったとしたら、七月七日の午後十一時五十五分から彦星素足渡河RTAを開催するわ」

「マジで彦星に何されたんだ!？」

私怨とかそのレベルじゃないほどの仕打ちである。

「そしてそれを肴に私は酒を飲むの。ああ旨いわ」

「お前酒飲めないだろ」

未成年飲酒ダメ、ゼツタイ。

「余ったからもらったんだよ。飾っておけてさ」

「ベランダに飾るの？ 邪魔だからやめてほしいんだけど」

「お前の家じゃないだろここ」

「いや、そういうことじゃなくて……まあ、いいわ」

「え、今の何。なんでちよつと不服そうなの」

「うっさいわねレッサーパンダ。やるんならさっさとやりなさいよ」

「ついにパンダから格下げされたのかよ」

「劣等パンダは黙ってなさい」

「全国のレッサーパンダファンに謝れ！」

ベランダのガラス戸を開ける。向かい側にはちようど梨乃の部屋の窓が見えた。

梨乃の考えていることが微塵も理解できない俺は、悲しく一人で笹の飾りを始める。かざりと言っても、柵に立てかけるだけなのだが。

「よっし完成！ 短冊付いたら終わりだな」

「……私が言うのもなんだけど、適当すぎないかしら？」

ベランダに顔だけ出している梨乃がじとりとこちらを睨みながら

言った。とはいっても、これ以上何をすればいいのだろうか。

「括りつけるとかしたらいいんじゃないの」

「括んの？ ……めんどくさいからいいや。さっさと短冊つけちゃおうぜ」

「ええ……私もするの？」

「当たり前だろ。俺に一人でしろっていうのか？ 花梨ちゃん呼んできてもいいけど」

「花梨は今日遊びに行ってるわ」

「最近毎日遊んでるなあの子」

「暇なんでしょ」

「俺の家に入り浸ってるお前が言うな」

ちなみに余談だがこの間俺と俺の友人が開催した第三回暇そうな人選手権では梨乃は四位だった。俺は二位。あながち間違つてはいない。さらに余談だが一番忙しそうな人選手権では満場一致で我がクラス委員長の風咲さんが一位だった。本当にどうでもいい。

一応部屋にあったビニール紐で笹を柵に括る。小さなベランダは笹でいっぱいになった。括ってみて気づいたが、笹の葉に遮られ梨乃の部屋の窓が見えなくなってしまった。

ちらりと横目で梨乃を盗み見る。梨乃はぼうつと笹の葉を見つめている。あまりシヨックではないようだ。

すると、ちようどこちらを見た梨乃とぼつちりと目があつた。

「……え、何でパンダが私を見てるの？」

「パンダネタまだ続くの？」

「言つとくけど今際の際まで言い続けるわよ。覚悟してなさい」

「それってプロポーズ？」

「なっ!? は、はあ!? その妄想癖何とかしてくれないかしら!？」

珍しく声を荒げる梨乃。その頬は微かに朱い。なんだか慣れないその反応に、俺は少しドキツとしてしまう。

「な、なんだその反応は……なんか微妙な反応になるからやめてくれ」

「……うつさへ」

梨乃はそつぽを向いて、部屋の中へ入っていく。そして流れるよう

な動作でガラス戸を閉め、そのままガチャリ。

のそのそと本棚の前まで歩いていき先ほどまで読んでいた漫画を探すその背中は綺麗で、思わず見とれて――

「って、鍵閉めてんじゃねえ！ 開ける!!」

叫んでガラス戸を叩くが、梨乃は無視。ベッドに寝ころんで漫画を読み始めた。ちなみに今梨乃が読んでいる漫画は数十巻続いている長寿漫画である。もし彼女が最新巻まで読むつもりなら、俺は少なくとも数時間は外で笹の話し相手になっっていなければならぬ。

「おい。いつまでそのままにいるつもり？ 長引くと気まずいぞー……?」

「……………」

「……まさか、ずっとこのままのつもりはないよな？ 幼馴染にそんな仕打ちはしないよな!! お前は優しい幼馴染だよな!!」

梨乃は厳しい幼馴染だった。



数十分後、笹と楽しく会話をしている俺を申し訳なさそうな目で見ながら梨乃がガラス戸を開けた。

「た、楽しそうに会話してるのね……」

「誰のせいだと思ってるんだ！ じゃあな、笹次郎……」

「男だったのね」

「いや、元々女だったんだけど色々事情があつて男になったそうだ」

「知らないわよ……って、なんで私がツッコミしてるのよ」

普通は逆じゃないとぼやく梨乃。どうやら一応自分がボケ役だと自覚しているらしい。いや、別に自覚はどうでもいいんだけれど。

「とりあえず、短冊書いちゃおうぜ」

「ええ……ホントにやるの？ はっきり言って面倒くさいのだけれど……」

「なんだお前、そんなこと言って。明日やろうは馬鹿野郎なんだぞ」
「そういうあなたは童貞早漏」

「おうラップバトルしとる場合ちゃうんやぞ？」

「もういいわ。さっさと書いちゃいましょう」

「無視かよ」

俺の言葉をガン無視し、短冊に何かを書き始める梨乃。なんだかん
だいってノリノリである。

さて、俺も俺で書き始めなければ。

ペンを握り願う事を考えてみる。

「……………」

特にないので適当に書いておこう。

『優しい彼女ができますように』



数分後、梨乃のペスが止まった。

「何書いたんだ？」

「ア○ジグが見たい」

「こんなところで短冊書かずに映画館に行け」

ガラス戸を開け、笹に短冊を括りつける。

すると、俺の後ろからにゅつと手が伸びてくる。梨乃が俺の短冊を
チエツクしているようだ。

「ふうん…………『優しい彼女』、ねえ…………」

「なんだその含みのある言い方」

「……………」

梨乃は何も答えず、自らの短冊をぐしゃりと握りつぶして部屋の中
へと入って行った。

アイツは何なんだと目を丸くしていると、意外なことに梨乃はすぐ
に帰ってきた。てつきりまた閉め出されるのかと思っていた。

「何してたんだ？」

「あなたには関係ないでしょう」

「いやまあ、そうだけど」

「それより退いてくれないかしら？ 私の貴重な短冊が結べないじゃない」

「その貴重な短冊さつき握りつぶしてましたやん」

「うっさいわね。死ね」

「はい」

横に逸れる。梨乃はぐいところらに手を伸ばして笹の葉を掴む。狭いベランダなので、梨乃のぬくもりがダイレクトに俺の肩に当たる。

「お、おい……」

「何どぎまぎしてんのよ童貞。キモ」

「……はよ結んでくれよ」

「もう結んでるわよ間抜け」

「俺怒ってもいいよなこれ？」

「DVで訴えるわよ」

「いつから俺はお前と家庭を築いていたんだ？」

「か、家庭って……あ、揚げ足取ってんじゃないわよこの揚げ足バード！」

「取りと鳥をかけるとかいう高度なボケやめてくれな」

普通にわからなくてちよつと戸惑ってしまった。

というわけで、俺のベランダが七夕仕様になった。目の前の笹には二枚の短冊がついている。

ふと、梨乃はどんな願いごとをしたのかと気になった。先ほどのア○ジンが見たいの短冊は自分で潰してたし、書き直したのだろう。

梨乃は既に室内に帰っている。見るなら今だろう。ぴらりと、風に靡く短冊を手に取り読んでみる。

『コイツの願いが叶いませんように』

「おい梨乃?!?!」

「うわ、ゴキジェット吹きかけられたムカデかと思った」

「なんでゴキジェットをゴキブリに吹きかけないんだよ！ ……いやそこじゃねえよー！」

「ゴキジェットはムカデにも効くのよ」

「そこ割とどうでもいいわ！ あの短冊何!?!」

「ああ、いい願いごとでしょ?」

にっこりと、いい笑顔を見せる梨乃。控えめに言って悪魔である。

「ちなみに私の願いの方が攻撃力高いからあなたの願い事は無効ね」

「何そんなルールあんの!?!」

子供の人気を取りたいのはわかるが、そこまで現代風にする必要つてあるのだろうか……。

がつくりと項垂れる俺を見て、梨乃は楽しそうな笑い声をあげた。
マジで悪魔、鬼、小鳥遊梨乃。

「つまり、俺は一生彼女ができないのか……」

「そんなことはないわよ?」

「え?」

「あなたの願い事、覚えてる?」

「願い事? 確か……優しい彼女ができますように、だったようなー」

「その通り」

俺の言葉は梨乃によって遮られる。

顔を上げた俺は、片頬で笑う梨乃とぼつちり目があった。笑っているくせに、その頬は朱に染まっていた。

「優しい彼女」は一生できないでしょうね」

夏祭り ①

人間、誰しも人生において決心すべき時と場所がある。その決心の度合いは人間によつて違ふし、その大きさも異なってくる。自分が出ることで他人が躓いているからといって、何も自分がその他人より優れているということにはならない。

引きこもりが家から出ようとその足を踏み出す決心と、俺たちがコンビニに行くために踏み出す一歩は同じ歩幅であつても意味が全く違ふ。同様に、たとえ他人が出来て俺が出来ないということがあつても、それは何も恥ずかしいことではないのだといえる。

他人が出来てお前は出来ないから恥ずかしい？ なに、お前が出来ないことを俺は出来る自信があるし、俺が出来ない他の事は他人には簡単なかもしれない。人によつてその壁の種類は違ふのだ。

何が言いたいのかという、まあ簡単で、俺に出来ないことがあつてもいいではないかという現実逃避である。

大丈夫、俺が出来なくて他人が出来たつてどうでもいい。俺は俺が出来ないことが出来る奴が出来ないことを出来る奴なのだ。うん、ややこしい。

「まあ、そんなこと言つたつて、劣等感を感じるんだよなあ……」

すれ違つた二人組の男女を横目で見ながら、恨めし気に呟く。その男女の服装はいつもと違い、なにやら煌びやかなもの。カランコロンと鳴り響く下駄の音が耳に心地よい。

俺の手には、一枚の紙きれが握られている。それは、俺が躓いている原因でもあり、俺が決心すべき問題でもあつた。

どくんどくんと心臓が鳴り響く。下手をすると破裂するのではないかと疑いたくなる。

到着したのは我が家。目的の人物が俺の部屋にいることを願いつつ、俺は玄関を跨いだ。



「梨乃、今暇か？」

「……本読んでるのがわかんないのかしら、鳥なの？」

「ごめんごめん、見てなかったわ」

「ほんつと……鳥みたいに見た目ね」

「え見た目の話だったの!? てつきり脳みそとかそこらへんだと思つてたわ俺! ていうかそういうこと言われたら傷つくから気をつけてな!」

「叫ばないでようるさいわね、で、何の用?」

「あー……いや、な……。まあちよつと、さ……」

「何言い淀んでんの? キモっ」

「……うっせ」

再び暴れ出した心臓を抑えながら、俺は息を大きく吸い込んだ。

人には誰しも、決心しなければいけない時と場所がある。

その大きさと種類は千差万別。誰も他人の躓きの種を嗤うことなどできないはずだ。

そしてここが、俺にとって、決心すべき時なのだ。

「一緒に夏祭り行かないか?」



事の発端は、商店街で配られていたチラシだった。

ファンシーな絵と文字で彩られたそのチラシには、でかでかと『夏祭り!』という文字が描かれていた。

それだけならまだ大したものではない。チラシを握りつつ、梨乃を誘って一緒に行くかなーなんてことを考えていただけだった。

しかし、問題はその後だった。

部活帰りであろう二人の男女がそのチラシを見て、こう言ったのだ。

「夏祭りだって。行く?」

「ええー……なんかあんたから誘われたら浴衣が見たいってだけのためみたいと思っちゃうんですけどー!」

「ひっどー! ……まあ、そういう気持ちがないってわけじゃないけれども!」

ぴたりと、俺の脚が止まった。

……うん?

浴衣が見たいために誘う?

女子からすると、男が祭りに誘うのってそういう風に映るんだろうか……。

そう考えるとなんだか不安になってきた。ただでさえ俺は毎日梨乃から変態だの劣情催すマンだのと馬鹿にされている。そんな状態で夏祭りに誘ったらどう思われるのだろうか。

想像しなくてもわかる! 絶対に馬鹿にされる!

だからと言って一人で夏祭りに行くのは悲しい。梨乃がいなくて夏祭りもあまり楽しくないだろう。

だとすれば、どう誘えばいいのだろうか。

俺の躓きの種は、こんな感じで大きくなっていったのだった。



そして場面は今に戻る。

チラシを梨乃に見せ固まった笑みを浮かべる俺は、かなり危ない容姿をしていたのだろう。いつもは澄ました表情が多い梨乃の顔が引き攣っていた。

……あれ、ていうかこんなにガチガチの状態で誘うって、逆に勘違いされそうじゃね?

やばい、非常にやばい。何がヤバいつて梨乃の表情がヤバい。引き攣りすぎてなんだか口の端が生き物みたいにぴくぴくしている。

急いで言い訳もとい弁明を始める。

「あ、いや別に浴衣が見たいってわけじゃないんだけどな!? ただチラシもらって面白そうだなーって思っただけで、別に邪な考えとかは

全くないからな!」

「あなたはリアクション芸人なの？ 自分から答え合わせしてるようなものじゃない」

「……………」

しまった。墓穴を掘りすぎてブラジルへついてしまった。ブラジルの人が聞こえないなら俺が赴くまで。

「…………ま、そこまで行きたいなら行ってあげるわよ。しようがないから」

「そうだよな、さすがに下心がバレバレ——つて、来てくれるのか!」
「わかりやすい反応するわねあなた…………しようがないからよ。発情したペットは飼い主が躰けないといけないから…………」

「おつけー、じゃあ八時からだから、それまでに準備して一緒に行こうぜ」

「あー、その、出発なんだけど…………」

「どしたの。なんか言いたそうな顔して」

それまでは冷やかな表情ながらも頷いていた梨乃が、いきなりもごもごと言い淀み始めた。何か言いたいことでもあるらしい。

「その…………できれば、その夏祭りの会場で待ち合わせしない？ その方が私としてはいいんだけど」

「え？ 会場で待ち合わせ？ ここから一緒に行つた方が楽じゃん」

「…………うるさいわね、とにかく現地集合で頼むわ」

「いや、まあ梨乃がそうしたいってんなら別に構わないけど…………なんぞ?」

「あなたにはどうでもいいでしょ、気持ち悪いわね」

ふいとそっぽを向いた梨乃の横顔は心なしか嬉しそうに見えた。

夏祭り ②

遠くから聞こえてくる鈴虫の声がいやに涼し気だった。

俺は片手に持ったうちわで自分を扇ぎつつ、ぼうつと空を見上げた。八時にもなると、辺りはだんだんと暗くなってきており、すれ違ふ人の顔がよく見えないほどになっている。カランコロンと下駄の音だけが辺りに響き渡っていた。

Tシャツで来た俺はどこか疎外感を感じ、少しだけ影の方へと動いた。なんだか自分だけ仲間外れみたいである。

「にしても、あいついつ来るんだ……?」

現在、八時十分。遅刻である。

まあ、梨乃の浴衣が見れるなら、三十分の遅刻までは許せる。

果たして梨乃はどんな浴衣で来るのだろうか。

頭の中で、梨乃の姿を思い描く。

いつもはそのままにしている髪を後ろに結って、その顔は薄い化粧が施されているかもしれない。金魚柄の浴衣で、手に巾着を持って笑いながらこちらに駆けてくるかもしれない。

……いや、笑いながらはないだろうな。どちらかと言ったら暴言を吐きながらこちらに来そうだな。

「ま、どちらにせよ可愛いんだろうけど」

「誰が可愛いのかしら?」

妄想の中へ旅立っていた俺の耳に、聞きなれた声が飛び込んでくる。

現実に戻ってきて、前を見ると、そこには当たり前だが梨乃がいた。

「うおっ! 梨乃、いたのか……びっくりするからいきなり声をかけるなよ」

「堂々と前から歩いてきてたわよ。あなたが気づかなかったんじゃない」

「悪い悪い。ちよつと考え事してた」

「悪いで済ませるつもり? 土下座しなさいよこのハゲ」

「ハゲてないから。ていうか、お前も遅刻してんじゃないかよ」

「遅刻？ 今十五分じゃない。四捨五入で八時よ」

「待て、それはおかしい」

流れるように行われる会話を一度区切る。なんだか今日の梨乃は活発的だ。いや、いつも同じようなものだけど。

俺は、改めて梨乃の姿を見る。

朝顔柄の浴衣に、新品の草履。髪は横に結っており、いつもは髪で隠れ見えにくい左耳がはつきりと見える。その耳がやけに色つぼくて、不覚にもドキリとってしまった。

化粧はしていないらしいが、興奮のために紅くなった頬はどんなチークよりも艶やかで、美しかった。

手には巾着と団扇を持っている。結局俺が妄想していた中で当たっていたものは巾着だけだった。なんだかかすごく虚しい。

「ていうか、あなたは浴衣じゃないのね」

「ん？ ああ、そこまで気合入れるほどのものでもないしな……」

「ふーん……」

「それにしても、似合ってるな」

「……そんなの、当たり前じゃない」

団扇で顔の下半分を隠しながら言う梨乃。なんだかその仕草が可愛らしく、俺はつい目を逸らしてしまった。

「じゃ、行くか。何やりたい？」

「テキ屋でニン○ンドース○ツチ取ってよ」

「あれは取れないようになってるんだ。いいか、あまり深く首を突っ込むな」

「……じゃあ、綿あめが欲しいわ」

何だかえらく子供っぽい要求をする梨乃。どうやら久しぶりの祭りなので童心に戻っているのだろう。

「おっけ。じゃ、行くぞ」

「え、あなたが一人で行くんじゃないの？」

「二人で祭り来た意味ないだろ」

花火は九時あたりから。あと数十分は回れるだろう。

俺たちは並んだ露天の傍を歩きながら、人ごみの中に入って行っ

た。



「……なんで人がこんなに多いのかしら……」

「そりやまあ、夏祭りだからだろ」

「それにしても多すぎでしょ……さっきから碌に歩けないんだけど」

「草履で来るからだろ。俺みたいにクロックスで来い」

「え、それが素足だと思ってた。そういえばちよつと変な色してるわね。気が付かなかったわ」

「逆になんて気づかないの?」

何とか綿あめを購入。団扇を俺に押し付けて来た梨乃は、携帯で綿あめの写真を撮って美味しそうに頬張り始めた。いつもとは違い子供っぽい仕草である。

「俺にも一口ちょうだい」

「はい、この棒の部分あげる」

「綿あめって知ってるか?」

「あ、射的あるじゃない。あれやりましょうよ」

「ああいうのって取れないんじゃないの?」

「取れる、取れないじゃなくて、やったっていう事実が楽しいんですよ?」

「確かに」

ふらりと吸い寄せられるように射的屋の前に立ち、景品を眺める。

様々な景品があるが、どれも重そうで取ることは叶いそうにない。

「これって、どう撃つの?」

「前のめりになって、出来るだけ景品に近いところで撃てばいいと思うけど」

「前のめりになったらトリガーに指が届かないんだけど……っ!」

台上上半身を乗せ、出来るだけ腕を伸ばして銃の狙いを定める梨乃は、しかし悲しいかな、その頑張りのゆえに肝心のトリガーに指が届かないでいた。

こちらを見る梨乃。そんな助けを求める目でこちらを見られても。まあ、このままだと埒が明かない。

俺は梨乃に覆いかぶさるようにして、腕を伸ばす。俺の胸辺りに梨乃の背中があたり、柔らかい浴衣の感触が伝わってきた。

いきなり密着されたので驚いたのか、梨乃の肩がびくと跳ねる。

「ちよ、ちよつと……!」

何かを訴えかけるように俺を見る梨乃。その頬は微かに朱い。

「しようがないだろ、こうしないと届かないんだから」

「じゃ、じゃあ早くしてよ!」

「耳元で叫ぶなよ……よつと」

ぱしゅんとあっけない音を立てて、弾が飛んでいく。梨乃が少し暴れていたため、弾は明後日の方へと飛んでいく。

「外れたな」

「あなたが変な事したせいよ。全く……」

「あと五発弾残ってるぞ。今のでコツは掴んだだろ」

「……………」

俺の言葉に、いきなり黙り込む梨乃。俯いているためその表情をうかがい知ることはできない。

暫くの間そのまま固まっていた梨乃だったが、不意に何かをぼつりとつぶやいた。

「……………」

「え?」

「だ、だから! コツとか全然わかんない! さ、さつさと手伝いなさいよこのボンクラ!」

「手伝うって何を」

「だから、さつきの……」

「さつきの? あのくつつついてたやつ?」

「……あれが一番わかりやすいつつだけだから」

「いやまあ、別にいいけれど」

くつつけるなら役得である。

再び梨乃の背中にのしかかるようにくつつく。今度は肩は跳ねな

かった。その代わりいやというほどにその体は硬くなっており、石になつたのかと一瞬疑つてしまった。

その体勢のまま四発撃つたが、硬くなつた梨乃の体では上手く照準を合わせる事が出来ずに、全て景品に掠りもしなかった。

最後の一発。梨乃が俺に銃を突き付けて来た。

俺が撃たれるのかとびくびくしていたが、どうやらそうではないらしい。梨乃の目を見ると、どうやら俺に撃てと言っているようだ。

「なんでもいいから落としてよね」

「ええ……絶対無理だろ」

「無理無理言つてたらなんでも無理なのよこのダメ人間。やろうと思ふ気力でね——」

「お前は小学校の先生か？ 撃つからちよつと離れといてくれ」

「……私の言葉を遮るなんていい度胸じゃない」

ぶつぶつ言いながら離れていく梨乃。不満はあるが景品は欲しいらしい。

梨乃が離れたことで集中することが出来る。俺はしっかりと狙いをつけ、弾を放つた。

弾はまっすぐに飛んでいき、なにやらよくわからないストラップを弾いた。

ぽとりと落ちるストラップ。射的屋のお兄さんが拾つて俺に手渡した。

「可愛い彼女のプレゼントだ」

「ありがとうございます」

「彼女じゃないです」

「そこは訂正するのな……」

ストラップを梨乃に手渡す。何やらタコのようなキャラクターだった。

梨乃は手に持ったストラップを一瞥して、鼻で嗤つた。

「ふん、何このゴミ」

「返せ」

「嫌よ」

「いやいらぬなら別に俺が使うよ」

「ただでさえゴミなのに持ち主までゴミになったらこのゴミがかわいそうじゃない」

「長つたらしいけど俺を馬鹿にしてるってことはわかったぞコノヤロー」

朗らかに笑う梨乃。今日見た中でも一番の笑みだった。

「だからまあ、私がおらつといてあげるわ」

「……素直にそう言えればいいのに」

「黙れ」

「はい」

時刻は八時五十分、もうすぐ花火が始まりそうだ。

「そういえば、学校のやつらと一回も合わなかつたな。来てないのか？」

「さつき委員長？ に会ったわ。風上さんみたいな人」

「風咲さんだろ。へー来てたんだ」

「友達と来てたっばいわ。なんだかすごく睨まれたけど、私何かしたのかしら」

「毒舌振りまいてたらそら嫌われるだろ」

花火が打ち上げられる場に行くために、少々急ぎ足になる。草履の梨乃は少し歩きづらそうだ。

「別に、私だって誰これ構わず毒舌を振りまいてるわけじゃないわ。人を選んで傷つけるタイプなの」

「余計性質悪いわ」

「選ばれたのは……っ、あなただけよ……ふう、ふう……」

「いじめかよ……って、大丈夫か？ 疲れてるっばいけど」

「どうやら早く歩きすぎたようで、梨乃は膝に手について息を荒くしていた。

「別に大丈夫よ。介護されてるわけでもないんだし、早く行きましよう」

「そうはいつでも、めちゃくちゃ疲れてるように見えるぞ」
「あなたの目がおかしいのよ。あとで動物病院紹介してあげるから」

「しれつと獣扱いしてんじゃねえ……よし、じゃあちよつとゆつくり行くか」

梨乃が息を正すまで待つ。気を使われたと勘違いしたのか、梨乃は俺を鋭く睨んだ。

「早く行きましようって言ったじゃない」

「まあそう焦るなって。どちらにせよ人が多くなってきたから急げない」

「……まあ、それなら」

「じゃあ行くか。とっておきの場所があるんだ」

「何それ」

「小学生の頃に見つけた、俺だけが知ってる穴場だ」

そう言つて、目的の場所を指す……が、人があまりにも多いのですぐに梨乃の姿を見失いそうになる。

「ちよ、ちよつと待って……」

「お前人ごみの中歩くの下手くそすぎだろ……ほら、掴まれ」

手を差し出す。梨乃は掴もうか迷っていたようだったが、結局がしりと掴んだ。少しひんやりとした肌が気持ちよかった。

ぐいと引つ張ると、人ごみの中から梨乃が飛び出してきて、俺の腕の中にほすりと入ってきた。

「ほら、さっさと行くぞ」

「わ、わかつてるわよ……」

今日の梨乃はあまり暴言を吐かないようで、ぶっきらぼうにそっぽを向いたものの、特に何も言うことなくついてきてくれた。



「ほら、ハハハ」

「誰もいないわね」

「逆に誰かいたら困る」

穴場に到着した俺たちは、先ほど買ったラムネを飲みながら近くにあった切り株に腰を下ろした。二人で座つても問題ないほどに大き

な切り株だった。

「あと数分で始まるな」

「ええ、楽しみだわ」

やけに素直な返事をする梨乃。ちらりと横を見ると、何か熱に浮かされたようにぼうつとした瞳で空を見上げている。

「……熱でもあるのか？」

「私？ 別にないわよ、ただ、本当に楽しみなだけ」

「楽しみって……去年も来てたんじゃないのか？」

「そりや来てたけど……あの時は花梨だけだったし」

さあと、優しい風が吹く。梨乃の浴衣の裾が揺れて、俺の太ももを擦った。

「花梨ちゃんと来ても楽しそうだけどな。色々と律義だし」

「あの子、内弁慶だから私には偉そうなのよ……って、そうじゃなくて」

「そうじゃないならどうなのさ」

「だから……ええつと……」

「お、花火始まるぞ」

何か言おうとしていた梨乃だったが、その前に花火が始まったようだ。

横で俺を睨む梨乃は無視して、空を見上げる。

ぽん、と間抜けな音が辺りに響き渡って、細い線が空へと飛んでいく。

どん！

大きな音と共に、細い線は大きな華となって宙に咲いた。

遠くから歓声が、波のように押し寄せて来た。

梨乃も空を見上げて、うつとりと花火を見ている。その瞳に反射した花火がとても綺麗で、俺は思わず見とれてしまった。

すると梨乃が俺に気づいたのか、こちらをちらと見た。

「何よ」

「別に……ただ、俺も楽しいなって」

祭りなんて、小学生のころからほとんど来たことがない。親が忙し

いので来てくれないため、行ってもあまり楽しめないと、心のどこかで思っていたからだろう。

だが、今日は違う。

相変わらず親はいないけど、違う人がいる。

代わりにはならないけど、それ以上の存在の人が、横にいる。

俺の言葉を聞いた梨乃は首を傾げ、少し微笑んだ。

「キモ」

「言いたいだけ言え」

「キモ、キモ、ハイパーキモい、クソキモイ」

「あと三回だけにしてくれ」

結構心に来た。

「ふふ……キモい、超キモい、ウルトラキモイ……キモすぎ！」

「おい今四回言っただろ」

「けど、そんな——」

どばん!!

凄まじい音が耳を聳した。見上げると、花火大会の締めであろう大花火が打ち上げられていた。

梨乃が何かを言っていたが、花火の音にかき消され聞こえなかった。

「なんか言ったか？」

「……別に、何も？」

「何もって——」

花火から、梨乃へと視線を移す。

梨乃は、こちらを見ながら優しく微笑んでいた。

その頬に差している赤色は、決して花火の光だけではないはずだ。

花火が散って、辺りは思い出したように暗闇に染まる。

それでも、俺の頭の中では先ほどの光景が太陽よりも眩い輝きを放っていた。

結局、俺が言いたいことは一つだけである。

俺の毒舌幼馴染が、可愛すぎて辛い。

小鳥遊花梨について 前編

とてもくだらないことを言ってみよう。

俺の幼馴染、小鳥遊梨乃の妹である小鳥遊花梨のつむじは左巻きである。

くるりと、まるでカタツムリの殻のように美しい左巻きのつむじは、見ているだけで魂が抜かれそうになるほどに美しい。不自然なほどに明るいその髪はとても柔らかそうで、目の前に座っている俺の鼻腔を先ほどから何やらフローラルな香りが攻撃している。

詩的な表現を終えた俺は、ふうとため息をついて、微動だにしない花梨ちゃんのつむじを眺めた。

そう、俺は幼馴染である小鳥遊梨乃の妹こと、小鳥遊花梨ちゃんに土下座をされているのだった。

何故こうなったのだろうか……。



事の発端は、何を隠そう俺の家に突然やってきた花梨ちゃんだった。

何やら真剣そうな表情をして俺の部屋に入ってきたその姿に、俺は度肝を抜かれた。

何故なら、俺の記憶の中の花梨ちゃんと目の前にある姿が全くと言っていいほどに異なっていたからである。

俺の記憶の中の花梨ちゃん（数年前である）は、梨乃と同じく艶やかな黒髪に、化粧を施していない健康的な顔だったはずだ。

しかしどうだろう、今俺の目の前にいる少女は、髪は不自然に明るく、その顔はナチュラルとはいえふんだんに化粧が施されている。長い睫にうるうるリップ。

その瞬間、俺の中にいた花梨ちゃんは死んだ。

衝撃を受けた俺をよそに、花梨ちゃんは近くのクッションに座った。ショートパンツから覗く生足が眩しすぎて、俺は目頭を押さえ

た。もしかすると、じわりと滲み出た涙をもみ消すためだったのかもしれない。

しかし、驚くのはそこだけではなかった。むしろ、そこから真の驚愕ポイントであったのだ。

ぴたりと正座をした花梨ちゃんが、そのまま流れるような動作で土下座をしたのだった。

いや……どういうこと？

花梨ちゃんの急な奇行に何も言えない俺は、ただただ彼女のつむじを眺めることしかできなかった。

そして、場面は最初に戻る。

「あのー……花梨ちゃん？」

「はい、なんででしょう」

「いつまでその恰好続けてるつもりなの？ あと、なんで土下座してるの？」

「おっと失礼、私としたことが肝心の内容を伝え忘れていました」

若干チャラくなってしまった花梨ちゃんの格好だが、性格は全く変わっていないらしく俺の記憶のままの口調で顔を上げた。

相変わらずチャライ見た目になったなあ……。

ちなみに今日の花梨ちゃんの格好は肩だしトップスにショートパンツである。非常に目のやり場に困る。

視線をうろろとさせていた俺は、このままでは不審に思われると、彼女の脚に視線を固定した。

「あの、なんで脚ばっか見てんですか？」

すると、上から届く困った声。

しまった、これじゃあ脚フェチみたいじゃないか。

「いや特に意味はない。それで、内容って？」

「あ、はい。実はお兄さんにお願ひしたいことがあります」

姿勢を正した花梨ちゃんは、こちらをまっすぐ見て、はつきりと言った。

「私と、デートしてくれませんか？」

勘違いしてほしくないことがある。

小鳥遊花梨は別におかしな子ではない。むしろ真面目で気が利く、いくなればクラスに一人はいる明るい感じの女の子なのである。

決して姉の幼馴染である男を捕まえ「デートをしてくれ」なんて言うような破廉恥な子ではないのだ。

聞き間違いをしたと心で結論付けた俺は、咳ばらいをして再び花梨ちゃんに尋ねる。

「えっと、ごめん。ちょっと聞こえなか——」

「私と明日デートしてくれませんか？」

遮られた。めっちゃ本気だった。

え、何この子暫く見ない間にこんなになっちゃったの？

そういえば今じわじわと来たけど見たけど見た目がめちゃくちゃ変わっているじゃないか。なんだこのギャルのファッションは。

「えっと……まず、理由を聞いていいかな」

「話せば長くなります。具体的には明日の午前二時十八分くらいまで」

「三十秒でよろしく」

「友達に見栄を張って彼氏の存在を仄めかしてしまいました」

「よろしい」

人間、素直が一番。

しかし、数年前までは女の子らしいメルヘンな格好でおままごとをしていた花梨ちゃんが、今では友達と彼氏について話すなんて、なんだか可愛らしいではないか。もしかして梨乃もこんな時期があったのだろうか。

「友人が『高校生にもなつて処女なんてありえないよねー』と言つてきましたので、つい『そうですね』と戯れてしまい……」

前言撤回。可愛らしいを通り過ぎている。

「えっと、ちなみにそれはどんな友人なの？」

「妙子ちゃんですか？　この子です」

携帯を見せてくる。ロック画面には、プリント倶楽部なるものを大きくする代わりに顔の細さを犠牲にしてしまった花梨ちゃんが、それでも健気になっこりと笑つてこちらを見ていた。そして彼女の横に、同じくモンスターになった妙子ちゃんとやらが立っている。

まあ、ギャルだった。

金髪で派手で、色々とすごくて……。

言うまでもなくギャルだった。

ということは、花梨ちゃんのこの格好は、その友人たちが色々と彼女に吹聴した結果なのだろうか。だとしたら許せん。いや、この服装に関してはありがたいのだが。

「随分と……その、個性的な友人なんだね」

「でしょう、私の自慢の友人です」

えっへんと胸を張る花梨ちゃん。こういうところは年相応で可愛らしい。

「それで、デートだっけ？　なんでまた俺と」

「私の近辺にはお兄さんしか異性がいないんですよ。私に父とデートしろとでもっ？」

「そういえば女子高だったね……って、合コンとかしないの？」

「妙子ちゃんが嫌がるので出来ないんです」

「なんだ、そんなギャルみたいなのが恰好してるのに合コンは嫌なのか」

「こんな格好のくせして深窓の令嬢らしくて、異性との付き合いをとっても大事にしているそうです」

「いいことじゃん」

「あまりにも異性と接したかららないその貞操帯ぶりから、彼女は裏で貞操帯子ちゃんと呼ばれているのでした」

「やめて差し上げろ」

普通にイジメである。ていうか異性と付き合ったことないんだつたらこの妙子とやらも処女じゃないか。なんだけしからんありがとうございませう。

俺の言葉に、花梨ちゃんはくすりと微笑んだ。

「機会があれば、お兄さんにも会わせてあげますよ」

「えー……別にいいよ」

「そんなこといって、妙子ちゃんがお嬢様って聞いた時、目がキラキラしてたじゃないですか」

ぎくーバレてたー。

まさか俺が、普段はギャルっぽいけど実はお嬢様な女の子萌えなのを見透かしていたとは、花梨ちゃんおそろべし。

「後でお姉ちゃんに言つときますね」

「待てそれはおかしい」

「何がおかしいんですか。浮気は報告ですよ」

「いや浮気っていうか、まだ付き合っていないから」

「まだ？ ということは後々……」

「……………忘れてくれ」

普通に口を滑らした。

「ていうか、まだ付き合ってたんですね。てつきりもう懇ろなのかと」

「なんで？ むしろいつも毒舌ばっか吐かれてるよ」

「ふーん、けど、この前デートとかしてたじゃないですか。夏祭りも一緒に行って」

「デートじゃなくて買い出しだし、夏祭りは成り行きでだよ。別に色っぽいことなんてなかったしね」

「お姉ちゃん、わくわくしながら準備してたんですけどね」

「……………聞かなかったことにしておく」

後でバレた時、俺が殺されそうだ。

「なんだか話が脱線してしまいましたけど、とりあえずデートしてく

「ださいね」

「いや、俺はいいけど……花梨ちゃんは大丈夫なの？」

「何がですか？」

きよとんと首を傾げる花梨ちゃん。可愛い。

「いや、梨乃とかがうるさそうだし」

「お姉ちゃんが？ 別に何も言わずに出ればいいだけじゃないですか」

「あ、そうね……」

この前、梨乃が花梨ちゃんは内弁慶だと言っていたが、案外本当のことなのかもしれない。

「ということで、明日の朝十時に駅前集合で！」

「え、普通に隣同士なんだし朝合流していけばいいんじゃない？」

「わかってませんねお兄さん。こういうのは待ち合わせするからいいんでしょーが！」

見栄からくるデートの割には、色々とあるらしい。

「まあいいけど。じゃあよろしくね」

「よろしくです！ あ、写真とかいろいろ撮ると思うので、格好とかしっかりしてってくださいね」

「はいはい……」

花梨ちゃんは満足したのか、さっさと帰ってしまった。

何だかどつと疲労感が俺の肩にのしかかってくる。激しい運動をした後のような倦怠感だ。

ごろんと寝頃がった俺は、ふとある事実に突き当たった。

「写真撮ったら、梨乃にバレるんじゃない？」

そんなこんなで、幼馴染の妹とデートをすることになった。

小鳥遊花梨について 中編

目覚めは最高だった。

何故かはわからない。ただ、俺の心の底から楽しさが溢れてきて、年甲斐もなく早朝の五時に飛び起きるといふ結果になってしまった。窓を開けると、早朝特有の爽やかな空気が雪崩れ込んできて、俺の部屋の濁った空気を追い出していく。

ちらりと見えた隣の家の窓を見て、思い出した。

そういえば、今日花梨ちゃんとデートだった。

「……いや、デートだから楽しみで早く起きたとかじゃないから……」
誰に対してかよくわからない言い訳を済まし窓を閉める。

確か待ち合わせの時間は朝の十時だ。あと五時間何をして潰そうか。とりあえず漫画本を手にとって、俺はそんなことを悩み始めるのだった。



目を開けると、視界いっぱいには白黒の漫画が広がっていた。

まさか転生で漫画の世界に!? と思ったがそうでもないらしい。先ほどから俺の鼻腔を紙の独特な匂いが擦っている。

手を顔に乗せると、何かが乗っている。見ると、漫画本だった。どうやら俺は二度寝をしてしまったらしい。

時計を見る。十時十分。

「……転生ってことで何とかならないかな」

全然ならなかった。

大遅刻になりそうな予感だった。ていうか、もう遅刻だった。

急いで支度を済ませ家を飛び出る。時計を見ると十時二十分。走ればあと五分で間に合いそうだ。

どうせ遅刻なら周りの景観を楽しみながら歩くのもよかったが、そんなことをすれば花梨ちゃんに殺されそうなので出来る限りの全力

疾走で目的地に向かう。

駅前の時計塔の前には、むすつとした表情の花梨ちゃんがいた。ベレー帽みたいな帽子にシンプルなベージュ色のワンピース、大して寒くもないのに肩にかけているショールが目についた。男の俺にはよくわからないフアツションだった。多分お洒落なんだろう。

花梨ちゃんは俺に気づくと、更に頬を膨らませる。とても可愛らしいが、今はその可愛らしさに溺れるわけにはいかない。

「遅いですよ、お兄さん！ 今何分だと思ってますか！ 二十六分ですよ、二十六分！ 初デートで遅刻とかありえないです！」

「待って花梨ちゃん。よく考えるんだ。二十六分だと四捨五入で十時だ。よって俺は遅刻じゃない」

「ふむ、なるほど。それなら遅刻じゃありませんね——って、そんなわけないじゃないですか！ 遅刻も遅刻、大遅刻ですよ！」

「いや、ほんとごめん。二度寝しちゃってさ」

「む、何ですかその普通の理由……。まあいいです。お昼奢ってくださいたら許してあげます」

ぶんすかと怒っている花梨ちゃんを何とか宥め、デートを始める。昼飯を奢るだけで許してくれるらしい。花梨ちゃんマジ天使。

すると花梨ちゃんは急に俺の服装をじろりと見て、大きなため息を吐いた。

「あのですね、お兄さん。だぼだぼのTシャツにジーンズって……デート舐めてんですか？」

「え？ ダメ？」

「ダメですよ！ 何ですか、タメの友人とでも遊ぶ気だったんですか!?!」

「タメみたいなもんじゃん」

「デートでしょ！ それ忘れちゃダメですよお兄さん！ 気合入れてお洒落してこなくちゃ！」

そうやって胸を張る花梨ちゃん。どうやら自分の服装を見ろといふことらしい。

「うん。まあ花梨ちゃんの服もいいんじゃない？」

「謎の上から目線！ 何この人怖い！ 自分の服装棚にあげちゃつて
る！」

「まあ、ともかくデート行こっか。ちなみに俺全く計画立ててないから、よろしく」

「お兄さんって絶対レストランで割り勘とか言っちゃうタイプの男の人ですよね」

「何言ってるんだ。俺はレストランに行く時は大抵財布を持って行かないから全部払ってもらおうタイプだぞ」

「思ってた以上に最低さん！」

両手を上げ降参ポーズを見せる花梨ちゃん。この子のオーバリーアクシオンは見ていて飽きないものである。

「それで、まずはどこ行くの？」

「え、ああ。うーん……私もてつきりエスコートされるものと思っていたので、考えてないですよね……」

ちらりと、こちらを恨めしそうに見る花梨ちゃん。半眼になった顔も可愛らしい。というか、ギャルみたいな見た目と相まって何故か色気が出ている。

「まあ、デートと言えば映画でしょ。映画館行こっか」

「……ありきたりなチョイスですね……まあいいです。行きましよう」

「俺ジョーカー見たい」

「それデートでチョイスします!? こわっ！」

割とドン引きしてるのか、少し俺から距離を取る花梨ちゃん。いいと思うんだけどな、ジョーカー。いや、確かにデート向けじゃないけども。

「まあ映画だったら大体なんでも面白いだろうから、行ってから決めたらいいでしょ」

「……なんか今日一番まともな台詞ですね。じゃあ、行きましようか。映画見た後はそのダッサイ服装を何とかするために服屋さんに行きましようそうしましょう」

「はいはい。仰せのままに」

映画館へと歩き出す。しかし数歩歩いて横を見ると、花梨ちゃんの姿がない。

振り向くと、彼女はその場から一步も歩かずにこちらを見ていた。

「……何してんの？」

「……お兄さんは、本当に女心がわかってないですね」

「どういうこと？」

ゆっくりとこちらに近づいてくる花梨ちゃんを見ながら、俺は内心首を傾げた。今の数歩の間に彼女は俺の女心の無さを再確認したというのだろうか。だとすれば、一体なんでそれがバレてしまったのだろうか。

花梨ちゃんは俺の前まで来ると、腰に片手を当て、もう片方の手で俺をびしりと指さして厳しい声で言った。

「普通デートと言ったら、手を繋いでいくもんでしょーが！」

「……いや、デートっていつでも、友達に見栄を張るための、いわば疑似デートなんでしょ？ なら別にそこまで本格的にやらなくても……」

「シヤラップ！ お兄さんは黙ってその手を差し出しとけばいいんですよー！」

「はいはい……ほら」

「どうもどうも」

手を差し出すと、上機嫌な言葉とは裏腹に、ちよつと躊躇したような動きで花梨ちゃんがその手を握った。花梨ちゃんの手はふわりと暖かく、距離が縮まったので心なしかいい匂いまでしてくるようだった。

「さ、行きましようか！ あ、そうだそうだ、写真撮るときましようね」

「え、これ撮るの？」

「当たり前じゃないですか！ ほら、ちよつとこっちに寄ってくださいー！」

俺の手をぐいと引っ張った花梨ちゃんは、繋がった俺たちの手を自らの頬にそつと当てて、そのままもう片方の手を高く掲げ携帯で写真を撮った。

「ほら、可愛い！」

「はいはい、可愛い可愛い」

「む、何だか反応が悪いですね。まあいいです、行きましようか」

手を繋いだまま、俺たちは歩き出した。その何とも言えない距離感に謎のこそばゆさを感じてしまう。

ちらりと横を見れば、嬉しそうな表情で写真を見ている花梨ちゃん
の姿。

その横顔に何処かの毒舌幼馴染の影を見出して、俺はそつとため息
を吐くのだった。



結局ありふれた感動モノの映画を見た俺たちは——しっかりと泣いた後——少し休むためにとある喫茶店で駄弁っていた。

「さっきの映画すっごいよかったですね〜」

「なんか年甲斐もなく感動しちゃったわ」

「む、お兄さん、感動するのに歳は関係ないですよ！ 感動したいときにするのが人間というものですー！」

「お、何だか見た目にそぐわず哲学的なことを言いよる」

「見た目にそぐわずってなんですか……」

運ばれてきたコーヒーをちまちまと飲みながら、俺は外を見た。昼時なので通りは人であふれている。こんな中を今から歩くのかと若干げんがりしていると、ウエイトレスが何かを運んできた。

見ると、座っている俺と同じくらいの目線の高さまであるパフェが
どんと置かれていた。

花梨ちゃんは舌なめずりをしながらそのパフェにスプーンを刺した。そして、そのまま輝くような笑顔でこちらを見た。

「あ、そういえば昼ご飯奢ってくれるんでしたよね？」

「悪魔かな？」

「小悪魔と言ってください」

パシヤリと写真を撮った彼女は、そのままもぐもぐとパフェを食べ

始める。可愛らしい顔で食べるんだなーなんてことを思いながら、俺もスプーンを突き刺した。

口に運ぶと、仄かに甘いクリームの味が広がっていく。

いつも食べてるクリームよりも甘いと感じるのは、値段が高いせい
か、はたまた目の前で満面の笑みを浮かべている彼女のおかげか。

まあ、わからなくてもいいか。

小鳥遊花梨について

後編1

「さて、問題は服装です！」

喫茶店でパフェを食べ終わり、体重を重くする代わりに財布を軽くした俺たちは（財布を軽くしたのは俺だけだが）、とある服屋の前に到着した。

花梨ちゃんは俺の手を握りながら、もう片方の腕を高くあげてびしりと服屋の看板を指さした。すらりと長い白魚のような指が艶めかしかった。指を彩るマニキュアがキラリと陽光に煌めいていた。

「別に新しい服はいらないんだけどな……」

「何言ってるんですか！　ここまですつと恥ずかしい思いをしてたんですよ、私！」

「なんで？」

「お兄さんがそんなクソダサファツションで恐れ多くも私と手を繋いでいたからですよ！　ホント、顔から火が出るほど恥ずかしかったですから！」

「それが人生の経験値になるんだぜ、花梨ちゃん」

「な、なんですかその台詞……格好いい！」

「……………あ、そう」

抜けてるところも可愛い花梨ちゃんであった。

このままベラベラと服屋の前で話し込んでいても良かったのだが、店員の視線と通行人の視線が痛いということでは花梨ちゃんは逃げるように店内へと入っていった。当然、手を繋いでいる俺も引きずられるように店内へ。

店内に入ると、新品の服の匂いが微かに漂ってくる。

目をあげると、そこには広大な服の海。正直全部同じに見える。

「さ、お兄さんはどんな服が着たいんですか？」

「なんでもいいよ。あれとかで」

「あれはレディースです。ちゃんと目付いてますか？」

「ちゃんと付いてます。あ、じゃああの服は？」

「あれもレディースです。ちゃんと玉付いてますか？」

「いやだからちゃんと——玉!？」

どうやら花梨ちゃんにも梨乃の遺伝子が受け継がれているようだった。

いや、というよりも梨乃と花梨ちゃんが両親からその才能を受け継いでいるのだろうか。

だとするならば、その遺伝子の出処は……………。

いや、よそう。俺は他人の家庭事情に口を挟むような野暮な男ではないさ。

例え梨乃のお父さんが奥さんに少々尻に敷かれているからと言って、深く考えすぎるのは早計である。

いやほんと、変な想像はよそう。

「お兄さん?　聞いてますか?」

「え、あ、ごめん。聞いてなかった」

どうやら俺が様々な想像をふくらませている間にも花梨ちゃんは健気に話しかけてくれていたらしく、俯いていた俺を見上げるようにこちらを見ていた。その瞳には心配の色が滲んでいる。可愛い。

その余りの可愛い姿に俺の妄想力は瞬間的に爆発し、僅か数秒にも満たない短い時間のうちに見事に花嫁姿の花梨ちゃんを脳内に描き上げた。

花嫁姿（俺の脳内のみ）の花梨ちゃんは、俺の言葉を聞くや否や頬を膨らませ半眼でこちらを睨んできた。

「ちゃんと聞いてくださいよ!　大切な話なんですから!!」

「ちゃんと聞いてるって、ケーキ入刀はせーので入刀にしよう」

「…………何言ってるんですか?」

「…………なんでもない。忘れて」

「いや、忘れられません。録音したので後で一緒にお姉ちゃんと聞きますね」

「三万で勘弁してください」

「ちよっ、冗談ですよ!　冗談ですから店内で土下座しながらお

金を差し出さないでください!　周りの目がヤバいですから!」

命の危機に面し土下座を遂行する俺を、慌てて引き止める花梨ちゃ

ん。甘いな、俺は命のためならなんだってする男なんだ。財布に忍ばせてある諭吉さんもあと一枚までなら渡せるぞ。

花梨ちゃんは羞恥で顔を真っ赤にしながら(可愛い)、俺の腕を掴んでぐいと引つ張った。

「とにかく、各々店内を巡り歩いて、いいなと思った服を持って集合ってことで！ いいですね！」

「はいはい」

そんなに恥ずかしくないじゃないと言いたいところだったが、肩を怒りで震わす彼女の姿を見ていたら冗談も言えなくなってしまう。耳を澄ますと、何やらブツブツと呟いている。

「……友達とかともよく来るお店だったのに、もう来れないじゃん……」

なるほど、これは怒って然るべきである。デートもどきのために連れてきた彼氏役の案山子がプライベートまで侵略し始めたなら、それは気分もよろしくなくなるだろう。反省反省。

どすどすと服を求めて歩いていく花梨ちゃんの後ろ姿に小さく謝罪をすると、俺も自分の服を探すべく足を踏み出した。



「それで、見つかりましたか？」

数十分後、服をどっさりを持った花梨ちゃんと合流。その服の量にうんざりしながらもとにかく試着室へと歩みを進める。

花梨ちゃんは俺の方を胡乱げに見つめると、吐き捨てるように言った。

「お兄さん、全然服選んでないじゃないですか。何やってたんですかさつきまでの時間」

「俺は少数精鋭派だからね」

「はいはい、そうですか。それで、何選んだんですか？」

「このジャージとかオシヤレじゃない？」

「なんで生きてるんですか？」

「ほほほ、なかなか心を抉りよる」

花梨ちゃんの心無い言葉に少なからず傷つきながら（ジャージは試着もせずにバイバイした）、試着室に到着する。

花梨ちゃんは手に持っていた服をこちらに寄越すと、面倒くさそうに言った。

「はい、じゃあこれ着て見せてくださいね！ 似合ってるのある

かどうかチェックするんで！」

「はいよ、ちよつとまっててね」

試着室のカーテンを閉め、閉鎖的な空間に身を委ねながらため息を吐く。目の前にはどつきりと積み上げられた服の山。男にはこれほどの量の服は要らないのだが、どうしたものか。

とりあえずまずは試着しなければならぬ。俺はげんなりしながらも、服の山に手をかけた。

▼
(ファッションには明るくないのでカット)

▼
「よし！ 完璧ですよお兄さん！ さつきのクソダサファッ

ションが嘘のようです！」

「さつきとそんな変わらんだろ」

「こっちの方が百万倍いいですよ」

カーテンを開け新たな服をまとった俺を見て、花梨ちゃんが目を輝かせる。

ちなみに花梨ちゃんが選んだ服は黒のジーンズに白のスウェットという簡単なファッションである。正直先程と何が違うのか分からない。

「ていうかちよつと暑いんだけど」

「我慢してください」

冷たすぎて泣きそうだ。

「それでお兄さん、その服買うんですか？」

「買おうかな、なんだかんだ服が多いのに越したことはないし。花梨ちゃんはなんか買わないの？」

「うーん……買いたいんですけど、あんまり持ち合わせが」

「そりゃ残念だ。さつき花梨ちゃんに似合いそうな服あつたのにな」

「どうせ童貞趣味丸出しの服でしょう」

「そういう事ってね、人が傷つくから言っちゃいけないんだよ？」

「じゃ、私外で待つときますね」

俺の嘆きの言葉を無視して歩き始める花梨ちゃん。俺は元々着ていた服に着替えるために、再び試着室のカーテンを閉めた。

小鳥遊花梨について 後編2

「随分と遅かったですね」

「まあ色々ね。じゃあ次どこに行く？」

「公園に行きましょう」

「公園ね、おつけー。ポケONGOか？」

「デート中にポケONGOするヤバイやつなんていませんよ」

「君の姉だぞ」

「情けない姉でホントにごめんなさい」

大きなため息を吐く花梨ちゃん。長い睫毛が憂いを帯びた色に染る。

「とにかく、公園でゲームはしないんでその携帯はしまってください」

「え、じゃあ何すんの。遊具？」

「いい年こいてなんで遊具で遊び呆けなきやいけないんですか」

「意外と楽しいぞ」

「聞いてないです。……お弁当ですよ、お弁当！ 公園デートで

お弁当は定番なんですから！」

頬をふくらませながら繋いだ手をぎゅっと強く握りしめる花梨ちゃん。その怒りの表現の仕方の可愛さにクラクラしながらも、疑問に思ったことを口に出す。

「花梨ちゃんって料理作れたっけ？」

「作れませんよ？」

「なんで自信満々な……ていうか手ぶらじゃん。その弁当とやらはどっから？」

「今から買いに行くんですよ」

「まさかの市販。ていうか今もうお昼って時間じゃないし」

現在午後の三時。

「デートに時間は関係ないですよお兄さん。そこに愛があればね」

「え、ああ、うん」

「まさかのヒキ気味。いつもみたいなのにツてきてくださいよ。私がヤバイやつみたいじゃないですか」

「お弁当ってスーパーで買うの？」

「……………もういいです」

拗ねたのか、ぷいとそっぽを向くギャル風美少女。なんだこの破壊力。天使か？

「そんな怒らないでよ、可愛い顔が台無しだよ？」

「なんでそんな歯の浮くような謝罪の仕方なんですか。絶対ふざけてますよね、許しません」

「参ったなあ、今のが精一杯の謝罪なんだけど」

「そうですか、ならお姉ちゃんにお兄さんがセクハラしてきたと言っておきますね」

「マジで許してホントにお願い一生の」

「見事なくらいに無様になりましたね」

そんなくだらない会話を繰り返しながら、スーパーへと向かっていく。

繋いだ手の違和感は既にどこかへ行っており、まるで昔からこうしていたかのようだった。



「はい、あーん」

「あーん……。うわ、めっちゃ美味しい」

「そうですか？　なら嬉しいです」

「生産者であるスーパーのおばさんの顔が目には浮かぶよ」

「三回ほどビンタさせてください」

時刻は四時を回ったあたり。俺たちは無事スーパーで弁当を買って、公園でそれを食べていた。チンしたばかりなので程よい温かさの弁当が体内を駆け巡り、歩き回ったせいで疲労困憊の体に力を与えてくれる。

既に写真は撮られている。デートという設定も忘れてはいないよ
うだ。

「そういえば、お兄さんに質問があるんですけど」

唐突に、花梨ちゃんがそんなことを尋ねてきた。

俺は弁当を食いながら、適当に答える。

「答えれる範囲の質問なら答えるけど」

「いっお姉ちゃんとかくつつくつもりなんですか?」

ぶひゅー。

弁当を吹き出す音が小さな公園に響く。俺の目の前で可愛く小首
を傾げていた花梨ちゃんの顔は、瞬く間に米だらけになった。

「うわ、汚っ! 何するんですかお兄さん!!」

「これはマジでごめん! ちよつと待って、はいティツシユ」

ふきふきと顔を拭く花梨ちゃん。意外なことに、あまり怒っていな
いようだった。

「いや、まあ質問が質問だったので不問にしますけど……それより、返
答を求めます」

「……黙秘権を行使します」

「バーリアツ! はいその黙秘権無効ー!」

「子供か! ていうか黙秘権は自分に使うタイプの技だから!」

「いてつくはどうです。その黙秘権の効果は消えました。さっさと答
えてください」

「なんだお前暴君か?」

なんとか回答から逃げようと言葉巧みに逃げ回ろうとするが、意味
を成さない。花梨ちゃんの目がマジである。

腹を括り口を開く。

「別に、梨乃とそういう関係になりたい訳じゃないしき、どう答えてい
いかわかんないな」

「まだそんなこと言ってるんですか。傍から見ればバレバレですよ」

「……そんなもん?」

「そんなもんです。まず毒舌を振りまくお姉ちゃんに好意的な人間は
お兄さんの他肉親しかいませんから」

「アイツぼっちだったのか」

「ええ、ぼっちもぼっち、ドボッチです。た○ごっちの新キャラドボッチです」

「謎かけが得意そうな名前だな」

「お姉ちゃんとかけまして、一寸法師と解きます」

「その心は」

「どちらも友(共)がいないでしょう。ドボッチです！ ……って何やらせてんですか！」

「花梨ちゃんが勝手にやったんでしょ」

「話を変えないでください！ お姉ちゃんといつくつつくんですか！」

目を三角にした花梨ちゃんが問い詰める。だが、そんなこと言われたって本当にくつつく気なんてないのだからしょうがない。

「本当に、そんな急いで関係を深めたいわけじゃないからね。ゆっくりやってくよ」

「そんなこと言って、取られても知りませんよ？」

「俺が？」

「金的かケツバット、選んでください」

「許して」

ため息を吐く花梨ちゃん。落ちてきた太陽と寂れた公園、その中心で微かに目を伏せる憂いを帯びた表情の美少女。退廃的な世界が広がっていた。

「まあともかく、梨乃とはこれからも仲良くしてくよ」

「まあ、それは普通にありがたいことですけど…あーあ、なんだかもどかしいですねー」

「人生なんてそんなもんさ。あ、ご馳走様」

「お粗末さまでした。じゃ、帰りましょうか」

立ち上がる花梨ちゃん。俺は彼女が歩き始める前に、手に持っていた紙袋を彼女の目の前に差し出した。

「その前に、はいこれ」

「……なんですかこれ？」

「プレゼント。どうぞ」

おずおずと、花梨ちゃんには紙袋を手にとった。中身は先程の服屋で俺が見つけた、花梨ちゃんに似合いそうな服である（花梨ちゃん曰く童貞くさい服らしい）。

紙袋の中身を確認した花梨ちゃんはしばしの間呆然としていたが、すぐに我に返ってぺこりとお辞儀をした。

「あ、ありがとうございます。サプライズ過ぎて結構驚いています……あ、お代は後で渡しますね」

「いやいや、プレゼントだから金はいいって。今日のデート代」

「そう、ですか……ならありがたく貰いますね」

そつと紙袋の中にある服を取り出す花梨ちゃん。そのまま服をじつと見て、色々と確認したあと、こちらを向いてニヤリと笑った。

「やっぱり童貞感丸出しじゃないですかお兄さん」

「……………うっせ」

それでも、やはり俺が選んだ服は花梨ちゃんに似合っていた。



帰宅した花梨は、リビングのソファに寝転がりながら漫画を読む姉、小鳥遊梨乃を見てため息を吐いた。

「ただいま」

「おかえり。随分遅かったのね」

「ちよつとねー。お姉ちゃんはお兄さんの家にいたの？」

「それがあの有袋類、留守だったのよ。腹立たしい」

「いつからお兄さんは有袋類になったの……？」

起き上がる梨乃。その視線は吸い込まれるように花梨の持っている紙袋に行った。

「服買ったの？ 見せて」

「へへー、これ！」

「……………うわー、なんていうか……………その……………」

「童貞くさい、でしょ？」

「そういう言葉は使っちゃダメよ、花梨」

「はいはい。ま、これは大切なプレゼントだからね、部屋着にでもするよ」

「なに、今日はデートだったの？」

「んー、まあそんな感じかな」

その言葉に、梨乃がにやりと笑う。彼女が時折見せる、意地の悪い笑みであった。

再びソファに仰向けになって寝転がった梨乃は両手を上に伸びし
て漫画を読み始め、意地悪い声音で言う。

「あらあら、大人になったのね、花梨も」

「お姉ちゃんが子供過ぎるだけだよ。いつ有袋類さんとくつつくの
さ」

がつん。

読んでいた漫画を落とし額にぶつけた音が響く。

「な、何を言ってるのかしら」

額を押え、涙目になりながら梨乃が花梨を睨む。しかし花梨はどこ
吹く風。そつぽを向いている。

「べつつにー、早くしないと取られちゃうかもよーって話」

「取られるって、私が？」

「……………はあ」

再び大きなため息を吐く花梨。多分、彼女の中には一抹の幸せすら
残っていないだろう。

そして、ちらりと手に持っている服を見てから、満面の笑みをうか
べ答えた。

「ううん、お兄さん！」

そしてそのままリビングを出て、自室へと帰っていく。

残された梨乃はほかんと口を開いて、その後ろ姿を見ていた。

「……………変な子」

そして再びソファに寝転がり——今度は横向きに漫画を読み始め
たが、何かが気になるのかすぐに起き上がって、携帯を取りだした。

そして数少ない連絡帳に載っている一人の男の名前を押して、電話
をかける。

その横顔は、なんだか幸せそうなものだった。

「……………もしもし。……………いや、特に用事はないけれど……………つていうか、今日なんで家にいなかったのよこの有袋類。……………え？」

デート？　ちよつと待ってなさい、今すぐそつち行くから。拒否

権？　バリアよバリア、そんなの無効だわ」

幸せそうだった……………。

おまけ

『ケーキ入刀はせーので入刀にしよう』

「……………ふふっ」

年越しは毒舌幼馴染と

磁石を砂場に近づければ、当たり前の話だが砂鉄がくっつく。

例えば砂鉄がどれだけ上手に砂の中に潜り込んでいたとしても逃げる場所はないのだと言わんばかりの磁力が砂鉄を引き寄せる。

掃除機の前に置かれた小さな埃も同じく、自らの無力さを嘆きながら吸い寄せられていく。

同時に、俺たち人間という存在にも、そういった磁石または掃除機のような存在がある。

抗い難い力、抜け出せない暴力。それの前では人間は無力だ。ただ平伏して時が流れるのを待つことしかできない。

いや、むしろ抗うことの方がおかしいのだ。それは俺たちに与えられた暖かな平穏、安らぎの土地。それに逆らって抜け出そうとするなど、愚の骨頂なのだ。流れるプールに逆らう馬鹿がいるか？ 大人しく流れとけ。

だからこそ、今俺がこうやって頭を垂れながらそれにひれ伏しているのは、ある意味当たり前のことだといえる。逆らう意味などない、むしろ、逆らわない方がいいのだから。

世の中には、今の俺のこの姿を情けないと、みつともないと罵る輩もいるだろう。

否定はしない。客観的に見た今の俺の姿はともみつともなく、まただらしがない。

だがそれがどうした？ こうすることによって快樂を得られるのであれば、俺はためらいなくそれを実行する。その何が悪い？ 何故非難を受けなければならないのだ。

俺は声を大にして言う。俺の今の行為は正しいことだ。だからこそ、何人たりとも俺を馬鹿にすることなどできないし、罵ることも出来ない。

俺はそんな意思を目に灯し、俺のことをゴミを見る目で見つめている幼馴染を睨みつける。どうか、俺のこの行為を邪魔してくれないな。

しかし非情なことに、幼馴染は冷たい視線のまま、口を開いた。

「で、結局その戯言が、一日中コタツの中でゴロゴロしていいという理由になりえるとでも思ったのかしら?」

思っていました。



「……なるほど、あなたは年越しという年に一度しかない行事を、コタツの中でゴロゴロしたいからというしような理由で無駄にしようとしていたのね」

「無駄じゃない。こうすることによって俺は快樂を得られるからな」
「殺すぞ」

「年の瀬だからか攻撃的ですな」

淡々と吐かれる暴言に怯えながら梨乃を見上げる。

梨乃は、コタツの中に全身を入れ顔だけを出している俺の目の前で仁王立ちをしたまま、ため息を吐いた。ちなみに今日の梨乃の格好は膝丈ほどまでのスカートなのでもう少しこちらに近づくと中身が見える。わくわく。

「まあ、あなたがそんな生産性のある人間だとは思っていなかったけど……」

「もしかしなくても酷いこと言われてる?」

「それで、今日は本当に家でダラダラする予定なの? 誰かと遊びに行かないの?」

「その予定はないな」

「ああ、友達いないものね」

「いるわい! たまたま今日は予定が合わなかっただけだし!」

「……っふ」

「何笑ってんねん」

「ま、しょうがないわね。じゃあ私もコタツにお邪魔するわ」

梨乃はそう言うと、俺の向かい側に腰を下ろしコタツに足を入れる。足を入れる際に冷たい空気が入ってきて、俺のふくらはぎを撫でていった。

「……ちよつと、足が邪魔なんだけど」

「えー……動けん」

「しようがないわね……」

「え、なんかしてくれんの？」

「のこぎりでいい？」

「切る気!？」

「あ、電ノコ派だったかしら」

「変わってない！　なんでちよつと譲歩したみたいなの顔してんの!？」

コタツに入っているはずなのに寒気が脊椎を駆け巡り、俺は弾かれたように起き上がる。その結果、背中をコタツの天井部分にぶつけてしまった。

痛がる俺を、呆れた目で見つめる梨乃。

「馬鹿なの？」

「そういうシンプルな罵倒は意外と堪えるからやめて」

「ねえなんで蜜柑がないのかしら」

「えー……リビングにあるから自分で持ってきてくれ」

「は？　客人を働かせるつもりなの？　あなた、常識というものが備わっていないのかしら」

「ほぼ毎日不法侵入してる奴が客人なわけないだろ。ていうか最近合鍵がなくなっただけど絶対お前だろ返せ」

俺がコタツに入り直し、背を丸めた状態で梨乃を睨むと、彼女はついと目を背けた。

「文句なら花梨に言ってちょうだい。あの子が勝手に持ってきたんだから」

「持ってきたんなら返せよ。なんで自分のモノにしてんの？」

「治外法権よ。あなたのルールは私には適応されないの」

「それ使い方あってんの？」

「うるさいわね。さつきと蜜柑取りに行ってきたさいよ。ぶん殴るわ」

よ」

「ちよつと暴力的になつてない？」

そう言いながら、俺はコタツから抜け出る。これ以上言いあつていても無駄なだけだ。暖かくなつた半身が急速に冷えていく感覚に震えながら、俺は自室から出て行つた。



蜜柑を持つてリビングから帰ると、完全にコタツの中に入り切つた梨乃の姿がそこにはあつた。

頭までコタツの中に入れているのか、彼女の腰まで届くほどに長い濡羽色の髪が、コタツの中から乱雑に飛び出していた。

「おい、何してんだ」

「ご苦労様」

「せめて顔出して言え」

「はい、早く蜜柑」

「手だけを出すな手だけを」

コタツの中からゆつと伸びて来た、白い腕を掴む。リビングに行つて戻るまでの短い間だが、俺の掌は十分に冷やされていたのか、掴まれた梨乃の腕がびくんと跳ねた。次いでぴよこんと梨乃がコタツから飛び出す。

「ちよつと、何するの！」

珍しく声を荒げる梨乃。何だかしてやつたりだ。

「人を奴隷みたいに扱つた罰だ。甘んじて受け入れろ」

「最悪、今すぐ消毒しなくちや……」

「あれ、もしかして違う意味で怒られてるの俺？」

梨乃は嫌悪感を隠そうともせず、近くにあつたティッシュペーパーで俺が触れた部分をごしごしと拭っている。とてもシヨックである。

梨乃は一通り腕を拭い終わると、コタツの上に置かれている蜜柑を徐に手に取つた。

「半分いる?」

「もらう」

コタツの中に入ると、再び言葉に出来ぬ幸福感が温もりと共に押し寄せてくる。

両手を入れて、顎をコタツの上に置いて温まる。俺の目の前には、両肘をコタツに置いて懸命に蜜柑の皮を剥く梨乃の姿が。どうやら梨乃は白い筋を全て取りたい派らしく、目を細めながら白い筋を摘まんでいた。

「白い筋、食べないのか?」

「美味しくないじゃない」

「そこに栄養がたくさん詰まってるんだぞ」

「興味ないわね」

「……あつそ……」

まあ、初めから聞いてもらえるとは思っていなかった。

全ての白い筋を剥き終わった梨乃は、達成感に満ちた表情で息を吐く。そしてそのままその蜜柑を半分に割り――

「はい、半分あげる」

――蜜柑の皮と白い筋をこちらに寄こしてきた。

「いやいや、おかしいだろ」

「好きなんじゃないの?」

「限度があるでしょ。え、お馬鹿さんなの? 俺のこと草食動物か何かだと思ってるの?」

「あなたが好きって言ったんじゃない」

「白い筋単体を好んで食べるサイコ野郎がいると思うか?」

「面倒くさい男ね……ほら、半分あげるわよ」

「なんで俺が駄々こねたみたいになってんの……まあ、一応もらうわ。ありがとう」

半分に割られた蜜柑を手渡される。ちよんと触れた指の先の冷たさが心地よい。

俺に蜜柑をあげた梨乃は、残った半分をもそもそと食べ始める。どうでもよいが、コタツの中に入っていると何故か梨乃がとても小さく

見える。

「やっぱ冬はコタツに蜜柑だよなあ」

「それより、初詣とかは行く予定なのかしら」

「え？ えー……いや、面倒くさいからいいや」

「行く友人がいないものね」

「いやいるから。勝手にぼっちにしないでくれ」

「ただちよつと予定が合わなかったただけだから……多分。」

不安げな表情をする俺を見て、梨乃はあざけるような笑みを浮かべている。何だか悔しい。

蜜柑を口に放り込んで、梨乃に言い返す。

「ていうか、そういうお前だってここにいるじゃんか。ぼっちだろ」

「別に、私は友人が欲しいなんて思ったことないもの。それに……」

「そこまで言うとな、梨乃は少しの間黙り込んで、こちらをじっと見つめて来た。」

「……それに？」

「……なんでもないわ」

しかしそれ以上何も言うことなく、梨乃はついと視線を逸らしたのだった。

その意味が理解できずに、俺は首を傾げながら新しい蜜柑を手にとった。皮を剥いて、半分にして梨乃に渡す。

「白い筋を剥かないなんて、デリカシーの無い男ね。冤罪で捕まればいいのに」

「なんで筋取らないだけで捕まなきやいけないんだ」

もぐもぐと蜜柑を頬張りながらこちらを睨む梨乃。何だかその絶対零度の視線も、コタツに温められて心なしか可愛らしい。

「ねえ、漫画取って来てよ」

「自分が読むんならお前が取れ」

俺の言葉に、しぶしぶといった感じでコタツから立ち上がる梨乃。寝そべっていたせいでスカートに皺が寄っている。

「あ、俺も読みたいから何冊か取ってきて」

「あなたみたいに自分の力を使わずに他人をこき使おうとするダメ人

間が将来どんな人間になるのか、一度未来へ行つて確かめてみたいわね」

「なんだブーメラン早投げ選手権日本代表か？」

「ま、どうせ来年あたりには死んでるからどうでもいいけど」

「なんで俺実家のハムスターみたいないないなんだよ」

どさりと、コタツの上に数冊の漫画本が積み上げられる。俺は一番上に置いてあつた本を手にとって、ごろんとうつぶせになつて読み始めた。

梨乃も漫画を手に取り読み始める——が、コタツに入ってきた彼女の足が、コタツの大半を占める俺の脚に触れた。彼女は顔を顰め俺の脚をとんと蹴つた。

「ちよつと、邪魔なんだけど」

「えー……ちよつと足ずらせば？」

「ずらしても当たるから言つてるのよ、ちよつと退いて」

「うーん……」

「完全にダメ人間になつてるじゃない」

生返事しか返さない俺に呆れたのか、梨乃はため息を吐く。

「ま、私にいい考えがあるわ」

そう言うと、何を考えたのか、コタツから出て俺の横に座り、ぐいと俺を横に押し退けてコタツに足を突っ込んだ。

「……何してんの？」

顔を上げ、急激に近くなつた梨乃を見る。寝転がっているので、コタツに肘を置いて漫画を読んでいる梨乃の表情は窺い知れない。ただ、ちらりと見える彼女の耳は、かすかに赤みがかっているような気がした。

「あなたが頑なにどかないから、私も強硬策を用いたまでよ」

「あ、そうなの……まあ別にいいけど」

うつぶせになつて漫画を読んでいるので、俺の右わき腹に梨乃の温もりが感じられる。いつもよりも近いその距離に、何故かどきりとしてしまった。

「そういえば、花梨ちゃんは？」

「友達の家で年越しパーティやってるらしいわよ」

「相変わらずだな……」

「変な友達と付き合ってたらしいのだけれど」

「大丈夫でしょ。この前遊んだ時もしっかりしてたし」

「ああ、あなたが幼馴染の妹に発情して連れまわしたあの日ね」

「……あれ、同じ日のことについて話してる？」

読み終わった漫画をコタツの上に置く。鳩尾辺りまでコタツに入っているの、当たり前だがとても暖かい。

暖かいと、まるでそれが運命だとしても言いたげに眠気がすり寄ってくる。

俺はその眠気を全て受け止め、意識を泥濘の中へと落としていく。

ぼんやりと宙に浮く思考の中、梨乃の声が聞こえた。

「あなたが……なら、一緒……もうで……あげ……いけど？」

「……………んあ……………」

何か言っているようだが、眠気のせいで言葉を言葉としてとらえられない。返事のような何か口から漏れ出ていく。

ふと、何か俺の頬に触れた。

それが何かわからないまま、俺の意識は完全に落ちていったのだ。た。



翌日、コタツで寝たため普通に風邪を引いた。

風邪をひいたので外出できないと梨乃に言うと、何故か不機嫌になっっていた。やはり女心はわからない。

毒舌幼馴染に甲斐甲斐しく看病される話

目を開けると、ぐにやりと湾曲した天井の木目が見える。

はるか昔の壁画のようにアメイジングなうねり方を披露する木目をぼんやりと眺めながら、俺は大きく息を吐いた。ずきりと痛む頭。「コタツなんかで寝なきやよかった……」

新年からついていない。そう嘆く俺を嘲笑うかのように、窓の外で雀が鳴いた。ちらりと見ると、ベランダの手すりに丸々と太った雀が止まっていた（笹の葉に止まろうとして、あまりの不安定さに慌てている）。

「だつせえ」

鼻で笑うと、今のお前には言われたくないとばかりに羽ばたいてくる。

その光景が微笑ましく、つい小さく笑う。こめかみが痛んだ。

大人しく寝とけという神からの啓示なのだろう。俺は大人しく鳩尾辺りまでずり落ちていた布団を再び引っ張り上げる。

目を閉じ、ぐにやりと面妖な文様が浮び上がる瞼の裏を見つめながら、心を落ち着かせていく。

程なくすると、暖かな眠気が静かに俺を囲んでいく。頭痛が和らいでいくようだった。

しかし、微睡みの中に揺蕩いながら、静かに眠りにつこうとしていた俺の耳に、何やら大きな足音が飛び込んできた。それも、複数。

足音はどんどんこちらに近づいてきて、ついには俺の部屋の前でピタリと止まった。

次の瞬間、開け放たれるドア。薄目を開けて見ると、見慣れた顔が二つあった。

「邪魔するでー!」

「邪魔するなら帰りなさい、花梨」

「おや、お姉ちゃん見てください。あんな所に天然記念物のコタツカゼビキがいますよ。珍しいですね」

「本当だわ。馬鹿みたいにコタツの中で熟睡して風邪を引いちゃう能無しがこの二十一世紀にまだいたなんてね、驚きだわ」

「写真撮る？ ネットに晒す？」

「花梨、他人をネット上に晒すのは危険だから止めなさい」

「はい、ごめんなさい」

「……晒すならコイツのクソダサ私服ファッションを晒すのよ」

「流石お姉ちゃん。じゃあまず何からにしよう。お、この意味のわからん英単語を羅列させただけの厨二シャツにしますか」

「お前ら出てけ」

和らいでいた頭痛が再びはしやぎ始めた。俺はドアの前で騒ぐ小鳥遊姉妹を睨みながら言った。

「聞きました？ お姉ちゃんさん。あの人、せつかく看病しにはる

ばる……ここまで来た私たちに、出てけですって」

「ああいう捻くれた奴が孤独死するのよ、花梨。よく見ておきなさい」

「……お前ら学校は？」

「休校ですよ。ニュース見てないんですか？」

「彼、日本語わかんないから……」

「あつ……」

「いやわかるわ。何であつ、まずいこと言っちゃった……みたいな表情してんの」

「どうやら彼女たちは俺を看病しに来てくれたみたいだ。そうなのだろうか……？」

頭痛の種が増えた気がしないでもないが、まあその優しさはシンプルにありがたい。素直に礼を言っておく。

「まあ、一人で気が滅入ってたところなんだ。ありがとな」

「おやすい御用ですよ、お兄さん。元々勝手に帰ったお姉ちゃんが悪いんですから」

「起こしたわよ。けどあなたが起きないから」

「起きるまで起こすんだよ、そういう時は。そんなんじゃないお嫁さんになれないよ？」

「そんな格好してる花梨には言われたくないのだけれど……」

ちなみに今日の花梨ちゃんの格好、白いホットパンツに気が狂ったのかと思うほどに裾の短い服。暖かそうなジャケットを羽織ってはいるが、それでも寒そうだ。よくそんな服を着れるものだ。ファッションに命を掛けすぎではなからうか。チラチラと見える臍が扇情的である。あ、やばい頭クラクラしてきた。

梨乃の言葉に、花梨ちゃんはちつちと人差し指を振る。

「お姉ちゃん、わかってないね。こういう格好してるお嫁さんが、案外旦那に尽くすからこそ、ギャップ萌えで世の男性はクラつとくるんだよ。ね、お兄さん?」

「どのタイミングで俺に聞いてんだ。俺は興味ない」

嘘である。ギャップ萌えは最高である。旦那が風邪を引いた時にしおらしく、甲斐甲斐しく世話をしてくれるギャルママなんて涎垂ものである。

しかし今言えば梨乃の反応が怖いので知らないふりしておく。

「尽くすって……花梨、あなた家事全般何も出来ないじゃない」

「わかってないね。家事も大切だけど、一番大切なのは愛情だよ、愛情。旦那のベッドに寄り添って、心配そうな瞳で見つめるのが結局一番なの。ね、お兄さん?」

「興味ない」

嘘である。そういうシチュはとても燃えるものがある。キュツと手を握られて、涙目で「早く良くなってね……?」なんて言われた暁には、気合いで身体の中の雑菌共を殺し尽くすくらいにやる気が出る。

しかし今言えば以下略。

梨乃は理解できないわとでも言いたげに肩をすくめると、手に持っていたビニール袋をコタツの上に置いた。

「どうせずーっと寝ただけだろうけど、一丁前に食欲はあるのかしら?」

「なんか刺々しいな……ていうか、お前料理出来んの?」

俺が尋ねると、梨乃は方頬笑んで、ビニールの中身を取り出した。

「ここにア○社長カレーがあります」

「お粥作ろうとは思わないわけ?」

「贅沢言わないでよ、これ高かったんだから」

「いやまああのカレーめっちゃ高いけれども……風邪の時はお粥でしょ……」

「蜜柑ないんですか?」

「なんで勝手にコタツで寛いでんの?」

カオスである。もうこの部屋に色々な情報がありすぎる。

「じゃ、私カレー作りに行くわ」

「私ちらし寿司が食べたーい」

「お前の命を散らしてやろうかつ」

「きゃーこわーい」

「姉妹でじゃれ合うな。もうご飯作るならさっさと行ってくれ」

「ところであなた、本当にただの風邪?」

「変な邪推はやめろ! 本当にただの風邪だよ!」

最近の若者はキレ症ねと眩きながら、梨乃が部屋を出ていく。

俺はおおきくため息を吐いて、ごろんと寝返りを打った。先程から頭痛が酷い。

そんな俺を心配したのか、花梨ちゃんが近寄ってくる。

「大丈夫ですか? お兄さん」

「大丈夫。ていうか、あんま近づかない方がいいと思うぞ」

クスリと笑う花梨ちゃん。そして、俺の髪をぐしゃぐしゃと乱暴に撫で始めた。

「お兄さんはいい人ですねー。こんな時にも他人の心配ですか」

「いや、他人の心配というか、これで本当に花梨ちゃんとかに風邪移したら、申し訳ないからさ」

「大丈夫ですよ。私馬鹿なんで」

「自覚はあったのか」

「オイ」

ぐいと俺の髪の毛を引っ張る花梨ちゃん。やめて頭皮が死ぬ。

顔を動かすと、ニマニマといやらしい笑みを浮かべた彼女の顔がそこにある。

俺の頭皮を死滅させる行為がそんなにも可笑しいのか、彼女はとても楽しそうだ。怖い。

「ていうか、今日は友達の家遊びに行かないのか？」

「妙子ちゃんですか？　なんか、ウイルスにビビりまくって引きこもってますよ」

「えらく心配症なんだな……まあ、それが正しいんだらうけど」

花梨ちゃんは俺の髪から手を離し、ずり落ちていた布団をかけなおしてくれる。何気ない仕草にどきりとした。

「じゃあ、花梨ちゃんも梨乃も家に居た方がいいんじゃないか？」

「隣の家なら大丈夫ですよ、多分。それにお姉ちゃんがソワソワしてためっちゃウザかったんです」

「ソワソワなんかしてないわ」

「あ、帰ってきた」

会話に割り込むように、ドアが開かれる。そこには皿を持った梨乃の姿が。どうやらカレーを作り終わったらしく、香ばしい匂いが部屋に広がる。作り終わったといっても、チンしただけなのだが。

「コイツの無様な姿を見たかっただけに過ぎないわ」

「またまた、ずっと心配そうに窓の外見つめてたじゃん。笹の葉っぱしか見えないのにな、うぶぶぶ」

「殺す」

「落ち着け」

カレーの皿を律義にコタツに置いてから拳を振りかぶる梨乃。慌てて起き上がって羽交い絞めにする。ぐわんぐわんと揺れる視界と暖かな感触が混じり合って、なんとも言えない心地だった。

「ずっとお兄さんの家の合い鍵を取り出しては、考え込んでまた仕舞っての繰り返しだったんですよ、この人」

「殺す」

「落ち着け！　俺は何も聞いてないから！」

「メール送ろうと携帯開いて閉じて、何か思いついたかのようコンビニにカレー買いに行つて何故かクツソ高いア○カレー買つて来てニマニマ笑顔で来たんですよ！」

「殺す」

「花梨お前ちよつと黙れ！」

ドタバタと暴れる梨乃を何とか押さえつける。先ほどから頭痛が酷い。叫んだ際にきりりと痛んだ。

暫くの間羽交い絞めにされたまま息を荒くしていた梨乃だったが、不意にその動きをぴたりと止めた。

そして暫く何も言わずじっとしていたが、やがて小さな声で呟いた。

「……離してくれないかしら」

「え、あ、ああ……」

離れると、梨乃は深呼吸をして——花梨ちゃんに拳骨を喰らわさせてから——コタツの上のカレーを取り俺に突き出してきた。

カレー特有のスパイスが効いた匂いが鼻腔を擦る。

「ほら、食べなさいよ」

「おお、ホントにカレーだ」

「当たり前じゃない。レトルトなんだから」

「お前が作る飯はレトルトでも信用ならんからな……いただきまーす」

手渡されたスプーンでカレールウと米をちよつどいい塩梅で掬い、口に入れる。

その瞬間、口に広がる仄かな甘みと、その後に波のように押し寄せてくる熱さを伴った辛味。汗が噴き出る感覚が、急速に身体を冷やしていく。

「おお、ホントにカレーだ！」

「ぶん殴るわよ」

「今日は何も入れなかったんだな。この前はウニっぽくなるとかいう噂を聞いて俺が買ってきて冷蔵庫に置いてあったプリンに醤油一瓶全部入れてたのに。醤油の味しかなかったぞあれ」

「病人に出すほど外道でもないわよ、私は」

「病人じゃなくても止めてほしいけどな」

梨乃は静かにベッドの傍に腰掛けると、俺の顔を見上げた。

「熱、測ってみたの?」

「朝な。七度九分だったわ」

「今測りなさいよボンクラ」

「はいはい」

体温計を使い、熱を測ってみる。

気まずい空気が流れるのも一瞬、すぐに乾いた機械音が鳴り響く。

七度五分。少しだけ下がっていた。この調子なら明日には平熱に戻っているだろう。

しかし梨乃は、体温計を持って心配そうに眉根を寄せた。

「まだ微熱ね……」

「別にこれくらいなんてことないさ。明日には治ってる」

「そうだよ、お姉ちゃん。心配すぎ。それより漫画取ってくんない?」

「お前はもうちょっと心配しろ」

ぐでーつとコタツに身を任せている花梨ちゃん。俺の言葉に、うるさそうに耳を塞いでコタツの中に潜り込んでしまった。猫か。

「じゃあ、今日は帰るわ。さっさと寝なさい」

「へいへい」

「冷蔵庫にポカリあるから、喉乾いたらそれ飲むのよ」

「なに、今日はえらく甲斐甲斐しいな? なんかいいいことでもあったの?」

その質問に、梨乃は軽く俺を睨みつけてくる。しかしすぐに俺の部屋が散らかっていることに気づき、コタツの上やら床の上に散らばっているゴミを片付け始めた。今日は本当に優しい幼馴染である。

あれ、毒舌じゃない梨乃ってただの美少女幼馴染じゃね?

梨乃にトキメキを感じていると、梨乃はこちらを向いて自信に満ちた表情で言い放つ。

「別に、大したことないわ。ただ弱ってる相手を痛めつけるのはフェアじゃないからね」

「何そのプライド」

ふふんと胸を張る梨乃。コタツから顔を半分だけ出した花梨ちゃ

んが呆れた目で彼女を見ている。

床に落ちているゴミを拾うために屈んだ梨乃は、小さな声で「それに——」と続けた。

「あなたがいないと、何しても楽しくないもの」
「……………」

それだけ言うと、ゴミを捨て終わった梨乃は、コタツの中にいた花梨ちゃんを引きずり出して部屋から出て行ってしまった。

静寂が部屋を覆う。彼女たちが階段を下りていく足音だけが、等間隔で伝わっていた。

大きく息を吐く。

「あっつ……………」

熱だろうか？

——それとも。

毒舌幼馴染のチョコは少し苦め

バレンタインデー、それは男にとって夢のような日であると同時に、悪夢のような日でもある。

こげ茶色の塊を片手に勝鬨の咆哮をあげる猛者もいれば、空のげた箱を目の前に崩れ落ちて涙を流す負け犬共もいる。

バレンタインデー、それは明らかに神が人間に優劣をつける日。福沢諭吉もまさか一日の間に全国でこれほどまでに差別が罷り通るだなんて思ってもみなかっただろう。

薄らと目を開けると、見慣れた木目が見下ろしている。

布団から這い出ると、未だに底冷えする空気が俺のパジャマを内側から攻めてくる。

立ち上がり、カレンダーを見る。そう、今日は運命の日、バレンタインデー。

普段の俺ならば仮病でもなんでも使って学校を休むのだろうが、今の俺はそこまで愚かではない。そう、今日の俺は焦る必要がないのだ。

ここで勘違いしてほしくないのは、焦らない⇨チョコがもらえないということではない。そんな簡単にチョコをもらえているのなら、俺は今まで泥水をチョコに見立てて啜る必要もなかったし、チョコを持つて狂ったように喜ぶ下賤な男共を横目に血の涙を流す必要もなかった。

そう、それは根本的な問題。チョコをあげるとか、チョコをもらうとか、そんなことを根底から覆すものだからこそ、俺は焦ることなくカレンダーの前でにんまりと笑うことができるのだ。

カレンダー上に載っている二月十四日の文字は、赤い。左端にちんまりと並ぶその様は、まるで「今まで調子に乗ってすみません。今週はあなた方に真ん中を委ねます」と頭を垂れて他の日にへつらっているようにも見える。

そう、本日二月十四日は、日曜日である。

俺はもらえない。それは確固たる事実である（泣きそう）。

だがお前たちももらえない。だって今日は日曜だもの。わざわざ休みの日にお前たちの家にまで赴いてチョコを手渡してくれる甲斐甲斐しい通い妻のような女はいない。よってお前たち下賤な男もチョコをもらうことはないということだ。何て優越感。

仮に月曜日にチョコをもらったとしても、それはバレンタインデーのチョコではない。だって二月十五日だもん。バレンタインデーじゃないじゃん。

ということ、俺は焦らない。何故なら俺以外のほとんどの男も、チョコを手に入れることがないからである。

学校がないということは、チョコをもらえなかった男たちと共に咽び泣く必要もないし、チョコをもらった男たちをうらやむ必要もない。俺は悠々自適に家で休むことが出来るのだ。

危うく高笑いしそうになったが、何とか理性で抑え込む。今ここで高笑いでもしようものなら、隣に住む某毒舌幼馴染さんがついに俺が狂ったかと救急車を呼びそうで怖いからだ。

さて、二度寝でもしようかなとベッドに飛び込もうとするが、その前に朝食を食べておいた方がいいだろうという結論に至り、部屋を出る。冷えた床に眠気が吹き飛んで行った。



「なんでいるんだ？」

「早く朝食作りなさいよ」

「会話が成立してないぞ」

リビングのドアを開けると、そこは毒舌だった。

……雪国風に解説してみたが、それでも理解が出来ない。

リビングには梨乃がいた。優雅にソファに座りながら、紅茶を飲んでいた。

「で、なんでここにいる？」

「朝食」

「コンビニで買うとかできないの？」

「ぶっ飛ばすぞ」

「なんで？」

理不尽な暴力宣言に震える。まあ朝食を作るくらいなら、俺の作る片手間に作れるだろう。

トーストでいいかと尋ねると、梨乃は小さく頷いた。何故かまな板の上に置かれていたティーポットから香ばしい匂いと共に湯気が立ち上っていた。

「花梨ちゃんは？」

「友達の家らしいわ。暇なのかしら」

「お前もだろ」

「口より先に手を動かさなさいよ蛭が」

「蛭は手ないぞ」

「じゃあ蠢きながら私の為に朝食を作りなさいよ」

「暴君か？」

軽口をたたきながらも、朝食を作っていく。

ふと、こいつは俺にチョコを渡しにここまで来たのではないかという考えが俺の頭の中に舞い降りて来た。

なんだかんだいって俺たちは幼馴染だ。幼馴染の関係ということで、巷で噂の友チョコとやらを渡しに来たのかもしれない。

そう考えると今まで朝食をねだりに来た毒舌乞食にしか見えなかったこいつが、何だか天使のように見えてくる。

トーストを焼き終わりテーブルに乗せると、梨乃がこちらに歩いてくる。さりげなく何か紙袋みたいなものを持っていないかと確かめるが、何もない。手ぶらだ。

どうやらこいつは本当に朝食をねだりに来ただけらしい。何て非

人道的なやつであろうか。

それでも一応聞いてみる。チョコをもらいたいという希望丸出しだとなんか悲しいので遠回しに聞いてみる。

「そういえば、今日って何日だっけ？」

「今日？　二月十四日だけど」

「あー、そっか……二月十四日か……」

「……？　それがどうしたのよ」

爆沈。我が幼馴染は本当に理解していないらしく、トーストにイチゴジャムを塗りながら可愛らしく小首をかしげている。

だが俺は諦めない。

「なんか、二月十四日って特別な日だったよなー……」

「……まあ、そうね」

今度は何やら考え込む梨乃。ついに俺が言いたいことを理解したのか。

すると梨乃は、悲しそうな表情のままトーストを頬張って、言った。

「二月十四日はキャプテン・クックが太平洋探検中にハワイで先住民に殺されてしまった日だものね……それは特別だわ」

「誰だよ」

どうやら全然理解していないようだった。梨乃は悲しそうな表情のままパンの耳を齧った。絶対に悲しいと思っていないだろう、コイツ。ていうか、絶対に理解している。理解しているうえで無視しているのだ。

暫くはにらみ合いが続く。先に目を逸らした方が負けだ。

勝者は俺だった。梨乃はしばらくの間知らんぷりをしていたが、やがてため息を吐いた。

「あー、そういえば今日はバレンタインデーだったわね」

「え？　そうだっけ？」

「白々しいったらありやしないわ。それで、チョコは？」

「あるといたら嘘になるな」

「あれ、作ってないの？」

「なんで俺が作んなきゃいけないんだ、男がもらう日だろ」

俺の言葉に、梨乃はおかしいわねと考え込む。

どうしたんだと尋ねると、梨乃は首を傾げながら答えた。

「いや、今朝花梨が、お兄さんが余りにもチョコをもらえなかったから自棄になって自作のチョコ『俺のイ○モツくん』なる傑作を作り上げたって夢を見たって言ってたから、もしや正夢じゃないのかと思っただけだけど、どうやら杞憂だったようね」

「君の妹、病気だよ」

「それで、俺イチくんは？」

「略すな。そんな頭おかしいチョコ作るわけねえだろ」

なんだ、そうだったのと少し残念そうな表情を見せる梨乃。もし俺が本当に作っていたのだとすれば、どんな表情をしていたのだろうか？

そんなことよりと頭を切り替える。

もう恥も外聞もない、そのまま聞いてしまえ。

「それで、お前はチョコをくれないのか？」

そう尋ねると、梨乃はきよとんとこちらを見つめた。

「あら、欲しかったの？」

「そりゃあ、男なら誰しもほしいさ」

「ちよつと待ってね、たしか冷蔵庫の中に余りがあつたような……」

「なんでお前俺の家の冷蔵庫からチョコ取り出して俺にあげようとしてんの？ それ俺のだよ」

「チョコじゃない」

「アホか？」

「文句が多いヤツね。畜生でも多少は従順だわ」

「畜生って言うなよ」

冷蔵庫からチョコを取り出した梨乃は、そのチョコをトーストに挟みサンドイッチにして食べ始める。俺にくれないのかよ。

「欲しいなら花梨に言いなさいよ。あの子料理は下手なくせにお菓子は時々作ってるし」

「お前は作れないのな」

「コンビニで買えるのに何で作る必要があるの？」

「夢も希望もないやつだな」

「古本屋に売っちゃったと思うわ」

「古本屋もよく買い取ったな」

買い取る価値があったことに驚きを隠せない。

トーストを食べ終わった梨乃は、ちらちらと時計を確認しながら立ち上がった。

「それじゃあ、もう帰るわ」

「あれ、もう帰んの？ いつもは部屋でダラダラしてくのに」

「そんな暇な身じゃないのよ」

「よく言うわ」

「じゃ、さようなら」

「はいよ」

そそくさとリビングから出ていく梨乃の姿を見ながら、一体どうしたのだろうかと考える。

まあ、考えたところでどうしようもないのだが。

俺は自分の朝食を食べ終わると、食器を流しに置いて遅すぎる二度寝をしに部屋に戻ったのだった。



その日の夕方、俺の部屋のベランダに一つの紙袋が投げ込まれていた。

中身を見ると、何やらチョコのようなものだった。

隣の家の窓を見るが、カーテンをぴったりと閉められているのでその中はどうかがい知れない。

部屋に戻りチョコらしきものを見てみると、それは何だか歪な形をしたものだった。

多分、梨乃が作ったのだろう。

いいところあるじゃんなんて思いながらそのチョコを口にした俺は、反射的に顔を顰めてしまった。

「めっちゃ苦いんだが……」

毒舌が作ったチョコも本人に似て、少々苦みが強かったようだ。だがそれもまた一つのチョコの味だ。

俺は残ったチョコ全てを口の中に流し込み、咀嚼して良く味わう。

相変わらず苦い。だが、このチョコを一生懸命作っている梨乃の姿を想像すれば、心なしか、苦かったチョコが少し甘くなったような気がした。

毒舌幼馴染と海

心地よい振動が柔らかな椅子に座る俺たちに響く。どうやらいつの間にかうとうとと微睡んでしまっていたようだ。

眠気で押し潰されそうな瞼を無理やり開いて車窓を見やる。青々と育った山の木々が滑るように視界から消えていく。降り注ぐ陽光の明るさが、木々の黒さを際立たせていた。

膝の上を感じる荷物の重さを確かめながら、俺は正面に座っている梨乃を見た。

梨乃は文庫本を読んでいる。どんな小説かはわからないが、彼女が読んでいるということはまあ難解な書物なのだろう。

じつと顔を見つめていると、梨乃は徐に頬を挟んで文庫本を閉じ、ため息を吐いた。

「そんなにじつと見られると、気が散るのだけれど」

「あ、悪い」

「三万寄せ」

「不良漫画でも読んでんのか?」

梨乃は横の席に置いていた肩さげ鞆に文庫本を仕舞った。

「あとどれくらいで着くのかしら」

「一時間もすれば着くだろう。それより、人が多くないといいけど」

「平日だし、そんなに多くないでしょ」

「(ゴゴ)そと鞆を漁っていた梨乃は鞆からペットボトルのジュースを取り出して蓋を開けた。電車の揺れに合わせてペットボトルの中心が静かに揺れている。

「それもそうか、平日に海行くやつなんてそうそういないもんな」

「あなたが誘わなければ私も行く気なんてなかったけどね」

「よく言うわ。俺の部屋に海関連のポスター貼りまくってたくせに。テロかなんかだと思っただわ」

「あれは私じゃなくて花梨よ」

「俺が部屋に入った時セロハンテープとポスター持ってたお前がいたけど、あれはどういうことなんだ?」

「……ほら見て、太陽があるわ」

「気を逸らしたいならもつと珍しいものを見つけてろ」

白々しく太陽を指さして目を逸らす梨乃。片手に持ったペットボトルの中身は未だに揺れていた。

「ていうか、花梨ちゃんは今日も友達と遊びに行ってるのか？」

「学校。休みなのはうちの高校だけよ」

「ああ、そういえばそうだったな」

「間抜けが」

「追加攻撃やめろよ」

そう言い終わると、梨乃は手に持っていたペットボトルを口に付けた。彼女の細く白い喉が艶めかしく動くのを、俺は見るともなく見ていた。

「そういえば、お前と海行くの、久しぶりだな」

「……小学生くらいの時に、家族旅行かなんかで行ったんだっけ」

「懐かしいな、えらく昔のような気分だ」

「脳はあの時から全く成長してないのよね」

「そういえばあの時お前溺れてたよな。それで俺に助けられて泣きながらお礼言ってくれたっけ」

「………ほら見て、窓よ」

何も言い返せないのか、梨乃は悔しそうに俺から目を逸らした。勝利、なんとも素晴らしい気分なのだ。

梨乃はニヤニヤしている俺が気に障ったのか、思い切り俺の脛を蹴り飛ばした。めちやくちや痛い。

「ふん。何を勝ち誇ってるのかしら。気持ち悪いわね。そんなんだから花梨に陰口叩かれるのよ」

「え、俺花梨ちゃんに陰口言われてんの？普通にショックなんだからどそれ。なんでそんな重要なことをサラッとカミングアウトしちゃうの」

「……まあ、別にそれはいいじゃない」

「よくねーよ。幼馴染の妹に陰口叩かれて平然とスルー出来るやつがいるか」

俺の言葉に、梨乃は面倒くさいわねえと溜息を吐く。何か言おうと口を開いたが、その瞬間に電車がトンネル内に入ったため、言葉が出てこなかった。

電車内の電灯の明るさにより、車窓は半透明の鏡になっていた。俺はその車窓に咲くようにぼんやりと浮かぶ梨乃の横顔を眺めながら、まだ見ぬ海と梨乃の水着に思いを馳せるのだった。

▼
数十分後、無事目的地である駅に到着した俺たちは、そこそこの荷物を持ち駅のホームに立っていた。

痛いぐらいの陽光が降り注いでいる。アスファルトはあまりの暑さにその身を白く光らせ、我々に逃げ水という形で警鐘を鳴り響かせていた。

どこからか聞こえてくる蝉の鳴き声に耳を傾けながら、ずり落ちてきた鞆を肩にかけなおした。

「あつついな……」

「ええ……ほんとにめっちゃくちや暑いわ……」

「日焼け止めとか持ってきて良かったな」

「うっさいわね、アホ」

「暑さで頭おかしくなってるぞ」

どうやらこの暑さで梨乃の毒舌のキレも鈍っているようで、放たれる言葉に棘がない。

とにかく改札を出るために階段へ歩き出す。

「ん」

「ありがとう」

重そうに両手で持っていた梨乃の鞆を受け取り、改札まで歩き出す。蝉の鳴き声の狭間から潮騒が聞こえていた。

「おおー……」

「おおー」

駅から出れば、目の前に海が広がっていた。

白砂青松の広がる夏のビーチは言葉に出来ぬ美しさを醸し出しており、俺たちは何も言うことなく暫くの間ぼんやりとその景色を眺め

ていた。

平日だがある程度人はいるらしく、ビーチの上にはちらほたとパラスルや寝っ転がっている人が見えた。

「とにかく、行くか」

「ええ、そうね」

せっかくの海なのだ、眺めているだけではしようがない。俺たちは荷物を置く場所を探すべく、ビーチへと足を運んだ。

「やっぱ平日はいいな。人がそんなにいない」

「水着ってどこで着替えるのかしら」

「そこら辺に着替える場所があるんじゃないか？」

「死ね」

「なんで？」

適当な場所にレジャーシートを敷き荷物を置くと、梨乃は水着に着替えるためにどこかへ行ってしまった。

ちようどパラスルをレンタルできる場所があったので手頃のパラスルをレンタルし、設置しておく。これで暑さはマシになるだろう。

俺は梨乃を待つべく、ごろんと寝転がり、海を眺める。何だか本格的に夏になってきた気分だった。

▼
数分の後、梨乃がやってきた。俺はぼんやりとその姿を見ながらため息を吐いた。

なんというか、ありきたりな言葉ではあるが、似合っている。

梨乃の水着はどちらかというと上下にわかれたワンピースのような見た目で、フリルの着いたネイビーのビキニと腰に巻いたスカートが彼女の可愛らしさを最大限に生かしている。しかし彼女が身に着けている大きなサングラスが、可愛らしさだけでは表しきれない妖艶さも生み出していた。

梨乃はこちらまで歩いてきて、寝っ転がっている俺を見てため息を吐いた。

「なんでビーチにまで来てだらだらしてるのかしら、このダイオウグ

「ならお前も裸で泳げよ」

「それってセクハラなんですけど」

「やかましいわ……」

戻って来たと同時に梨乃の毒舌を喰らった。しかし先ほどの俺の失態はなかったことにしてくれているのか、それに関する悪口はない。

梨乃はどこから取り出したのか大きな麦わら帽子を被っていた。

「しかしまあ考えてみれば、二人で海来てもあんま楽しくないな。友達誘えばよかったかもな」

「いない友達をどうやって誘うっていうのよ」

「なんでいつも俺に友人がいないみたいなの言いたい方すんの？ 良心の呵責とかないわけ？」

「日焼け止めの成分表にそんなのが書いてあったような……」

「やだよそんな日焼け止め。なんで紫外線から身を守るために心を痛めないといけないんだ」

「精一杯苦しめばいいのにね」

「会話繋がってなくないか？」

「早く泳ぎましょうよ。時間は待つてはくれないわよ」

「会話にさえついていけないわ」

梨乃は麦わら帽子とサングラスを外しレジャーシートの上に置く。

泳ぐのにはどちらも邪魔なのだろう。

「さ、早く行きましょう」

「荷物とか見張つといた方がよくないか？」

「そんな大したもの持ってきてないし、盗られたとしてもあなたを犯人に仕立て上げればいいだけだし」

「解決してないじゃん」

「私の心はすつきりするわ」

「代償がでかすぎる」

無駄口を叩きながら海に入ると、ひやりと冷たい水が踝を掠るよう過ぎていく。熱くなった体が一気に冷めていく。

隣を見ると、梨乃も同じく足だけを水に浸したまま、棒立ちしてい

た。

「さて、何で遊ぶ？」

「……………ビーチバレー？」

「……………砂浜行くか」

なんともグダグダな海水浴であった。



ぴちやり。何か冷たいものが肩に当たった。腰まで海に浸かっているのに波によって出来たしぶきかと思っていたが、どうやらそうでもないらしい。

「雨降り始めた？」

「そういえば、今日は午後から降るらしいけど……………天気予報見てなかったの？」

「全然見てなかったな。じゃあさつきと上がるか？」

「……………そのほうがよさそうね」

既に俺たちが海に入って数時間が経過している。海に入りちよつと泳ぐだけでも時間というものはあっという間に過ぎていく。

俺たちが海から上がったタイミングを見計らったかのように、ぽつりぽつりと砂浜に黒い点が増え始めた。

すぐに本降りになるということなので、急いで着替えに行く。



「見事に大雨になってるな、これ」

「台風並みじゃない……………なんでいきなりこんな大雨に……………」

駅に着いた俺たちは、外を見ながら溜息を吐いた。俺たちが着替え終わり、駅に着く頃には雨は本降りになっており、白く染め上げられた矢のような雨粒によって数メートル先も見えないような状況だった。

「何時くらいまで降るんだろうな、すぐ止めばいいけど」

「そんなあなたに残念なお知らせよ」

ぐいと携帯を差し出してくる梨乃。画面を見ると、そこには天気予報のアプリ。降水確率は100%。雨が止む時間は……。

「午前3時か……」

「ちやんと天気予報見とけばよかつたわ、最悪」

「まあしゃーないだろ」

「こんな男と1秒も長く一緒に居なきや行けないなんて……」

「失礼だろ」

特に理由はないが、屋根のある場所から手だけを出してみる。

——一瞬でずぶ濡れになった。

「さっさと帰るしかないな。雷も鳴りそうだ」

「そんなあなたに更に残念なお知らせよ」

そう言い、梨乃はそのスラリと長い指で俺の頭の上を指さした。顔を上げると、電光掲示板がある。

少し体をずらして掲示板を見ると、そこには赤く大きな文字が流れていた。

『大雨により、電車の遅れや運転を見合わせる場合がございます』

「……マジか」

「大まじよ」

「どうする?」

「どうするって……ここでずっと待ってる訳にもいかないし、どこか休めるところでも探した方がいいんじゃない?」

「休めるところねえ……」

携帯で検索を試してみる。何個か結果が出てきた。

「近くに泊まれるところあるっぽいぞ」

「……しようがないわね、そこに行くしかないわ」

移動中（俺は傘を持っていないため、相合傘になる。梨乃はずっと不機嫌だった）。



「ごめんなさい、いきなりの雨でお客さんがいっぱいなんです。一部

屋だけなら貸せるんですけど……」
というわけで、毒舌幼馴染と一緒に泊まりをすることになった。
——いや、どういうわけだ。

毒舌幼馴染と海 ②

前回までのあらすじをしよう。

毒舌幼馴染と海に来た。⇒雨が降ってきた。⇒毒舌幼馴染と一緒に泊りすることになった。

………は？

控えめに言って意味がわからない。なんでこうなってしまったのだろう。

俺はため息を吐いて考え込んだ。

近くに泊まれる場所があったので来てみれば、そこは旅館のような場所だった。料金やばいのはと思ったが、思ったよりも良心的な値段で一安心したのはここだけの秘密である。

広縁に設置されている安楽椅子に座りながらぼんやりと窓の外を眺める。未だに雨脚は強く、締めきった窓の隙間からざあざあと涼し気な音が聞こえてきていた。

旅館ということもあって、部屋は畳&布団である。ベッドというわかりやすい領域がない分、少し気まずい。緩んできた浴衣の帯を適当に締めた。

梨乃と同じタイミングで風呂に入ったのだが、やはり女は長風呂のようで、俺だけが先に部屋に帰ってきてダラダラしているわけである。泊まる予定はなかったのだから、やることがない。

布団は既に敷いている。布団と布団の距離がやたら近いので梨乃にそのことを言ったらゴミムシを見るような目で睨まれた。なんとも理不尽な話である。睨まれただけで何も言われなかったのが幸いであった。

「これからどうするかが問題だよなあ……」

幼馴染という関係上、今までも同じ部屋で寝るといふ経験は何度か体験したことがある。

しかしそれは子供の時の話だし、その時は親や花梨ちゃんも一緒だった。まさか高校生になって二人きりで一緒の部屋に寝泊りするとは思ってもみなかった。

気まづくないと言えば嘘になる。口は悪いが梨乃は美少女なのだ。そんな幼馴染とあの距離で寝る……いや、無理死ぬ。

やはり布団は少しだけ離しておこう。

俺は部屋の中に戻り、布団を数十センチ離れた。これで無駄なときどきは回避できる。

俺が安堵のため息を吐き、布団の上に座つたと同時に、部屋のドアが開いた。

「キツシヨ」

「なんで開口一番シンプルな罵倒なんだよ」

今までずっと風呂に入っていたからか、梨乃の肌は少し赤らんでおり、いつもは感じれない色気が滲み出ている。だぼだぼの浴衣を身に纏った梨乃は何だかとても可愛らしかった。無造作に持つフルーツ牛乳の瓶がその可愛らしさを後押ししているように思えた。

梨乃はフルーツ牛乳の瓶と肩に下げていた小さなハンドバッグを机の上に置いてから俺をじろりと睨む。そしてそのまま流れるような動作で自分の布団を引っ張り俺の布団に近づけた。

「あなた、お風呂から上がるの早すぎじゃない？」

「男なんてそんなもんだろ。逆にお前が長すぎなんじゃないか？」

「(´▽｀)そとハンドバッグを漁り、その中からコーヒー牛乳の瓶を取り出した梨乃が、それを無造作にこちらに投げて来た。

「え、あなた男だったの？　あまりにも女々しかったからちよつと言動が気持ち悪い女の子かと思ってたわ」

コーヒー牛乳と共に罵声まで投げてくるとは思っていなかったの
で、礼よりも先に文句が出る。

「思い切り男湯に入っていくの見てただろ」

「男湯のロッカーに潜りにいったのかと思って」

「そんなキモイことするわけねーだろ」

「雨、止まないわね……」

「聞けよ……。3時まで止まないとらしいからな」

「気持ち悪いわね……」

「……。え、それ俺に言ってるの？　だとしたらなんでそんな唐突に悪口言われなきゃいけないの俺？」

悪口を言い終わってすつきりしたのか、梨乃は鞆の中から化粧水やらを取り出して自分の顔に塗りたいくらい始めた。どうでもいいがとても気まずいので洗面所でやってほしい。

手持無沙汰になった俺は、持っていたコーヒー牛乳の蓋を開けた。そして、まだ梨乃に礼を言っていなかったなと思い直し、飲む前に礼を言っておくことにした。

「これ、ありがとな」

「……ん」

まさか俺が素直に礼を言ってくるとは思っていなかったのか、梨乃は肩越しにこちらを振り返り、すぐにぷいと前に向き直ってしまった。まあ、そんなじろじろ見られると恥ずかしいのでありがたいっちゃありがたい。



「それで、何するんだ」

「寝るに決まってるでしょ」

布団の上に座った梨乃が呆れた目線をこちらに投げかける。心做しかその頬は少し赤い。

梨乃は寝る前の準備を終わらせたのか、既にその脚を布団の中に入れて上半身だけを起き上がらせている。

「逆にあなたは今から何をするつもりだったのかしら？　ああ、言わなくてもいいわよ汚らわしい。その下卑た顔つきから想像出来てしまうわ」

「いや、せっかくのお泊まりなんだし、トランプとかあったらそれで遊ぶうかなーって……」

「……………」

「……………」

沈黙。梨乃の気まずそうな表情が新鮮だった。広縁に続く、閉じられた障子から漏れでる雨の音が心地よかった。

「ま、寝るか」

「……………そうね」

消え入りそうな梨乃の声に、俺は苦笑を浮かべる。

梨乃はそんな俺を鋭く睨み、そのままゆっくりと布団に入っっていく。威嚇しながら後ずさる小型動物のようだった。

「てか、布団近くないか？　もうちよつと離れた方がいいと思うけど」

「じゃああなたが畳の上で寝なさいよ」

「布団の存在意義って知ってるか？」

「むにやむにや、美味しそうなスイカ……」

「宇宙一下手くそな狸寝入りだな……」

暖簾に腕押し。梨乃は全く聞く耳を持たず、布団を動かす素振りすら見せない。俺は諦めて布団に滑り込んだ。暖かな幸せが俺を包む。肺に溜まっていた空気を全て吐き出しぼんやりと天井を見た。暗闇の中にぼんやりと浮かぶ木目が不気味だった。

ふと、梨乃はどうしてるのかと横を見ると、布団から顔の上半分だけを出した梨乃とぼちり目が合った。俺と目が会った瞬間に布団の中へと消えていく梨乃。

構わず梨乃の頭がある辺りの布団を見つめっていると、諦めたのかしぶしぶ布団から顔を出してきた。

「……………」

「いや、目が合ったから」

「目が合ったから何？　バトルでもするつもりなのかしら」

「なんでそんな好戦的なんだよ。いや特に理由はないけどさ……」

「理由がないならなんで息してるの？」

「生きることも許されないのか。儘ならん世の中だな」

「ママならん世の中？　世界に向けてのセクハラかしら、気持ち悪いわね」

「毒舌が強引すぎる」

梨乃も眠たくなってきたのか、だんだんと言葉に力がなくなってきた、次第に小声になってきた。暗闇の中にぼんやりと見えるその双眸は、心なしかとろんと眠たそうにも見える。

俺も寝るかなあなどと思っていると、不意に眩い光が窓を突き抜け、障子の木枠の四角い影が俺の布団の上に浮き出て来た。次いで耳を聳する轟音。

雷だ。

そんなに激しい雨なのかと辟易しながら障子を見る。先ほどの雷光で浮かび上がった恐ろし気な影は既に見えず、大人しそうな表情で広縁を隠している。

「意外と近かったな」

明日には雷も止むだろうと聊か呑気な気持ちで梨乃を見やる――が、先ほど俺を睨んでいた顔が見当たらない。その代わりに見えるのは、不自然に膨らんだ布団のみ。

「……何してんの?」

「そんなこともわからないのかしら」

「……雷が怖いからうずくまってるのか?」

俺の言葉に、梨乃の布団の中からくぐもった嘲笑が聞こえて来た。

「どこをどう見たらそんな間抜けな言葉が出てくるのかしら」

「いやどこをどう見てもそうだろ」

「ヨガよ」

「……あ、そう」

本人がヨガというのなら、それはヨガなのだろう。

俺は寝返りを打ち瞼を閉じた。

すると、俺の背中に凄まじい衝撃が襲う。振り返ると、梨乃の布団から脚だけがゆつと飛び出していた。はだけた浴衣が何とも扇情的である。

「なに」

「……なに?」

「いや……蹴ったから」

「蹴ってないけど」

「その脚はなんなんだ」

「ヨガ」

「……ヨガなら一人でやってくれ。もう眠いから」

「は？ さつきからずつと一人でやってますけど？ あなたがいちい

ちちよつかい出して邪魔してきてるんでしよう？」

「はいはいすみませんね、じゃあおやすみ」

「ちよつと待ちなさい」

再び寝返りを打とうとした俺を、梨乃が止める。しかし、呼び止めたはいいものの梨乃は何も言う気配がない。彼女の瞳には何かを言いたそうな、もどかしさが色濃く映っていた。

「……………」

「……………」

続く沈黙。

——まあしかし、その沈黙の意味くらいはわかる。

布団から腕を出し、梨乃との布団の境目に置く。

「ほら」

「……何その手は」

「ヨガ」

「……………うぎ」

消え入りそうな声で梨乃が呟き、そして畳の上に置いた俺の掌に暖かな感触。久々に握った梨乃の掌は笑ってしまっほほどに小さく思える。俺が成長したのか、梨乃が縮んだのか。まあ前者なんだろうけど。

そんなどうでもいいことを絶え間なく考えておかないと、少しヤバい。何がヤバいかと聞かれると答えることはできないが、ヤバい。

ため息を吐く。すると、それに答えるかのように雷光がひらめいた。連動するかのよう梨乃が俺の手を強く握る。するとその連動にまた連動して、俺の鼓動が早くなる。

「ほんと、儘ならんよなあ……」

そんな俺の眩きは雷によって消され、その音に怯え強められた梨乃の掌によって握りつぶされたのだった。

一番夕子の悪いイタズラ

10月31日、それは、日本国民が狂う日。

人々は自らの承認欲求を満たすため、仮装という名の愚行を犯す。奇つ怪な服装を身にまとい、顔中に絵の具やらで傷を描きこんで、街へ繰り出してゆく。

首都などは大いに盛り上がり、その熱に浮かされた馬鹿たちはありもしない勇気を奮い起こし国家権力である警察に喧嘩を売りに行く。

ハロウィン、又の名を仮装大会。

あんな馬鹿げたイベントに参加するやつはどうかしている。わざわざ人の多いところでよくわからん格好をしたがる物好きなんてそうそういないだろう。

携帯をぼんやりと眺めながら、俺はそんなことを考えていた。

ハロウィンだかなんだか知らないが、俺にとってはいつもの日常である。特別な日だからといって街へ行く必要は無い。

幸い、この辺りは都会という程都会でもないの、夜中にはしゃぎまくる馬鹿はいない……はず。いや、わからん。ハロウィンは人を狂わせるからな、今日は朝まで遊ぶぞ！　なんてとち狂ったアイデアを捻り出したヤベー奴が騒ぎまくるかもしれない。

そんな偏見を盾にハロウィンに噛みつきながら、俺はちらりと窓の外を見た。

梨乃の部屋の明かりは消えている。

只今の時刻、夜の10時。つまり彼女は寝ているかどこかへ出かけているかということになる。

もし出かけているとなれば、やはりその目的はハロウィンだろう。仮装した梨乃……ふむ、悪くは無い。

前言撤回、ハロウィン、中々いいイベントではないか。

まあ、この目で見なければ意味ないのだが。

そんなことを考えていると、玄関のドアが開けられる音が聞こえてきた。この家の鍵を持っているのは、俺と、親と、そして小鳥遊家の

姉妹である。親である可能性はかなり低い。こんな時間にこんな勢いでドアを開けるほど、彼らは彼らの人生を楽しんでいない（なんと悲しい話であろうか）。もちろん俺でもない。となると、答えは一つ。

しかもこんな時間帯だ。もしかすると、もしかするかもしれない。淡い期待に胸を踊らせながら静かに待つ。どたどたと廊下を走る音が聞こえてくる。

足音は階段をのぼり、そのまま俺の部屋の前まで走り抜け、そして

「トリートオアトリート！　今すぐこの家にあるお菓子を全てこちらに寄越してくださいお兄さん!!」

「お帰りはこちらからになります」

「窓じゃないですか!」

俺の部屋のドアを勢いよく開けたのは、よく分からないマントを羽織った花梨ちゃんだった。よく見ると、その口からは安っぽい牙が二つ覗いている。

「せっかく一人寂しく泣いてるお兄さんのために仮装して来てあげたのに酷くないですか、その扱い!」

「余計なお世話だ。別に泣いてないし」

「その心、泣いてますよね」

「ドキュメンタリーみたいに言うな」

現れたのが花梨ちゃんです。少し残念。いや、めっちゃ失礼だ。もちろん花梨ちゃんの仮装も大層可愛いのだが、想像していた人物が違っていたので、失礼ながらもがっかりしているというわけだ。

「お姉ちゃんが来なくてガツカリ、みたいな顔してますね」

「ししししししてないが?」

「そんな真顔で動揺されても……てか、表情で丸わかりですよ」

「マジ?」

「マジ」

「どんな顔してた?」

「鳩がスタンガン喰らったような顔」

「鳩が何したって言うんだ」

動物虐待反対。

それはともかく。

「梨乃は？」

「さあ、寝てるんじゃないですか？」

「そうか……」

「まああんな脳みそが昭和時代から追いつけてないようなお姉ちゃん
は放っておいて」

「聞かれてたら殺されるぞ」

「それより！ お兄さん、私の仮装見て言うことないんですか！」

「言うことねえ……」

そう言われ、花梨ちゃんの仮装をじっくりと見てみる。

多分コンセプトはドラキュラなのだろう。マント羽織ってるし、牙
出てるし。

しかし如何せんちやっちい。なんか小学生が工作の時間に色鉛筆
で描いたヒーローみたいな感じ。

「もう少し頑張りましょう」

「まさかのダメだし！ サイテー！」

「いや、仮装が適当すぎるでしょ」

「あーあ、もう知りません。お兄さんには呪いをかけました」

「ドラキュラなのに呪いで攻撃するのか……」

「そんなのどうでもいいでしょ！ それより、私がかけた呪いは恐
ろしいですよ」

イツヒツヒと、些か古い方法で脅かしてくる花梨ちゃん。両手を顔
の前まで持ち上げ、手の甲をぶらりと垂れ下げる。それはお化けの
ポーズじゃないのか……。

「どうせタンスに小指ぶつけるとかそんなんだろ」

「そんなちやっちいもんじゃありません！ なんと、一回13錠く
らい飲まなきゃいけない胃薬の残りの数が絶対12錠になってしま
うという恐ろしい呪い！」

「しよっぱ」

「これでお兄さんは毎回あと1錠で足りるのに新しい胃薬を買わなきゃいけないのです!」

「いや別に12錠で飲むわ」

「ぐわああああ!」

「どうした」

「ぐ、の、呪いの反動が……!」

「まずいなそれは」

「の、呪いの反動とは、一回誰かに呪いをかけるとその代償に自分の命を捧げなければならぬというアレなやつです……!」

「あんなしょぼい呪いに命かけてたのか」

「こ、この呪いを癒すためには……この家にあるお菓子を全て私に寄越さなければ……な、なりません……ガクツ」

「安らかに眠ってくれ」

「……もう! お兄さんノリが悪いですよ!」

「どう接すれば正解だったんだよ」

うつ伏せの状態からムクリと起き上がり、頬を膨らませながら腕を組んで座り込む花梨ちゃん。可愛い。

「そこは大人しくお菓子をくれたらいいんですよ!」

「賊か?」

「もういいです。お姉ちゃんには、お兄さんが『俺は狼男だぞ』って鼻の下伸ばしながらセクハラしてきたって言うとききます」

「よし、いくらでもお菓子をあげよう」

わざわざ災いを選ぶほど、俺も馬鹿ではない。花梨ちゃんの呆れた視線が痛い。

用意していたお菓子を取りだし、花梨ちゃんに手渡す。

その手際の良さに、花梨ちゃんは驚いたようにこちらを見た。

「随分と用意がいいですね……もしかして、元々用意してました?」

「ま、お菓子あげるくらいそんなに難しい事でもないしね」

「はえ、カツコイイですねえお兄さん! モテないけど!」

「返せ」

「セクハラ! 触らないでください! この狼男!」

「どちらにせよ狼男にされんのかよ！　なんて野郎だ！」

花梨ちゃんはするりと俺の腕をかわし、廊下に立つ。

「じゃ、お菓子も貰ったんで帰りますね！」

「ホントに奪いに来ただけかよ……あ、待って花梨ちゃん」

「なんですか——つと……なんですかこれ？」

「お菓子。梨乃に渡しといて」

「む、仮装もしてないお姉ちゃんが私より豪華なお菓子貰ってます。

これは贋品です」

「そんな変わらんだろ。ま、イタズラされるよりかはマシだしな」

「何言ってるんですか、お兄さん」

「？」

花梨ちゃんはお菓子の入った袋から顔を上げ、とびっきりの笑顔を
見せた。

「お姉ちゃんにとって、このお菓子こそが一番心臓に悪いイタズラで
すよー！」

そう言い残し、どたどたと階段を降りていった花梨ちゃん。ほどな
くして、玄関のドアが閉まる音が聞こえる。

残された俺は、呆然と廊下を眺めながら、呟いた。

「まんじゅうこわいみたいな感じ……？」